

特別史跡大湯環状列石
環境整備事業（第Ⅱ期～第Ⅳ期）報告書



平成 29 年
鹿角市教育委員会

特別史跡大湯環状列石
環境整備事業（第Ⅱ期～第Ⅳ期）報告書

平成 29 年
鹿角市教育委員会

序

大湯環状列石は、万座と野中堂環状列石を主体とする縄文時代の遺跡であり、その特異な形態と規模から昭和26年には国史跡に、さらに31年には特別史跡に指定されております。

鹿角市では、この貴重な文化遺産の保存と活用を図るため、平成10年度より史跡環境整備事業を進めてまいりました。整備対象地が広範囲であることからIV期に分け、第Ⅰ期では野中堂・万座環状列石周辺、第Ⅱ期では万座環状列石西側・南西側、第Ⅲ期では野中堂環状列石東側、第Ⅳ期では野中堂環状列石南側を対象としております。

遺構や地形の復元、植栽により縄文時代の雰囲気を感じられる史跡となり、平成14年に開館した大湯ストーンサークル館は平成27年には来館者が40万人に達しております。また平成20年には「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」として世界文化遺産暫定一覧表へ記載されております。今後とも世界文化遺産登録に向け、史跡の価値や魅力の発信を行ってまいります。

本報告書は、第Ⅱ期から第Ⅳ期環境整備事業の概要をまとめたものであり、遺跡の保存・研究に活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本事業を実施するにあたりご指導・ご助言を賜りました大湯環状列石環境整備事業検討委員会の各委員、文化庁文化財部記念物課、秋田県教育委員会、発掘調査並びに環境整備事業に関してご協力いただきました関係機関、各位に心から厚くお礼申し上げます。

平成29年3月

鹿角市教育委員会

教育長　畠　山　義　孝

例　　言

- 1、本報告書は、平成15年度から平成27年度に実施した「特別史跡大湯環状列石環境整備事業（第II期～第IV期）」の報告書である。
- 2、本事業は、鹿角市が事業主体となり、国庫補助金（国宝重要文化財等保存整備費補助金）の交付を受け、実施した。
- 3、整備の実施設計は株式会社歴史環境計画研究所が行った。
- 4、本事業にあたり、大湯環状列石環境整備事業検討委員会、文化庁、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、秋田県埋蔵文化財センターの指導・助言を受けた（検討委員の所属は任命時のもの）。

第II期(平成15～19年度)

委員長	小林 達雄	國學院大學教授
副委員長	富樫 泰時	横手市市史編纂文化振興室
委員	沢田 正昭	筑波大学教授
委員	熊谷 常正	盛岡大学教授
委員	安村 二郎	鹿角市文化財保護審議会副会長

第III期(平成20～24年度)

委員長	小林 達雄	國學院大學名譽教授
副委員長	富樫 泰時	横手市市史編纂室
委員	沢田 正昭	国士館大学教授
委員	熊谷 常正	盛岡大学教授
委員	大里 勝藏	鹿角市文化財保護審議会委員

第IV期(平成25～27年度)

委員長	小林 達雄	國學院大學名譽教授
副委員長	富樫 泰時	秋田県文化財保護審議会会长
委員	沢田 正昭	国士館大学客員研究員
委員	熊谷 常正	盛岡大学教授

- 4、本報告書の執筆・編集は、鹿角市教育委員会生涯学習課が行った。
- また、本事業体制は次のとおりである。

第II期(平成15～19年度)

教育長	織田 育生	平成18年12月まで
	吉成 博雄	平成19年 4月から
教育次長	阿部 成憲	平成15・16年度
	米田 公正	平成17・18年度
生涯学習課		
課長	三上 豊	平成15年度
	村木 伸夫	平成16年度
	相馬 田富	平成17・18年度
	秋元 信夫	平成19年度
文化財班長	秋元 信夫	平成17年度まで
主幹	藤井 安正	平成18・19年度
主事	上田 学	平成17年度まで
主事	田村 信仁	平成18年度
主事	三浦 貴子	

第III期(平成20～24年度)

教育長	吉成 博雄	平成24年7月まで
	島山 義孝	平成24年7月から
教育部長	中山 一男	平成20年度
	青山 武夫	平成21・22年度
生涯学習課		
教育次長	青澤 敏博	平成23年度から
	奈良 實	平成20年度
	岩根 務	平成21年度
	熊谷 純二	平成23年度

生涯学習課

課長	秋元 信夫	平成21年度まで
	渋谷 伸輔	平成22年度から
政策監	阿部 安男	平成20・21年度
主幹	藤井 安正	平成22年度から政策監
主任	三浦 貴子	平成23年度まで
主事	黒沢 健明	平成23年度から

第IV期(平成25～27年度)

教育長	島山 義孝	
教育部長	青澤 敏博	
教育次長	奈良 義博	

生涯学習課		
課長	渡部 勉	
政策監	藤井 安正	平成 27 年度課長待遇
主事	黒沢 健明	平成 26 年度まで
主事	赤坂 朋美	
主事	工藤 海	

5、図面については、既刊報告書のほか、実施設計書から転載した。なお、縮尺は任意である。

また、写真については教育委員会で撮影したもののか、施工業者が撮影したものを持載している。

6、本報告書に使用した地形図は国土交通省国土地理院発行の「毛馬内・花輪（縮尺 1/25,000）」を使用した。

7、本文中において用語の主たるものは統一するよう努めたが、既刊報告書の表現によりこの限りではない。

目 次

序

例言

目次

第1章 大湯環状列石の概要	1
1節 立地	1
2節 史跡の概要	1
3節 沿革・指定	1
第2章 環境整備事業に至る経緯	3
1節 基本構想	3
2節 基本計画	4
第3章 発掘調査の概要	7
1節 これまでの発掘調査	10
2節 環境整備に伴う発掘調査	12
第4章 環境整備事業の概要	15
1節 第Ⅰ期環境整備	15
2節 第Ⅱ期環境整備	18
3節 第Ⅲ期環境整備	23
4節 第Ⅳ期環境整備	27
5節 まとめ	34

付図

- ・第Ⅱ期環境整備工事
- ・第Ⅲ期環境整備工事
- ・第Ⅳ期環境整備工事

第1章 大湯環状列石の概要

1節 立地

鹿角市は秋田県北東部、東は岩手県、北は青森県と県境を接する北東北の中心に位置し、南北に十和田八幡平国立公園を擁する盆地である。この盆地を流れる米代川は小坂川、大湯川を支流にもち、これらの川の両岸に発達した段丘上には縄文時代から近世まで420ヶ所余りの遺跡が分布している。

大湯環状列石は鹿角市十和田大湯地区に所在し、JR花輪線十和田南駅から北東約3kmの距離にある。遺跡の乗る台地は、大湯川と豊真木沢川によって作られた南西方面に延びる長さ5.6km、幅0.5~1.0km、標高150~190mの舌状台地で通称「中通台地」と呼ばれる。

遺跡周辺には、縄文時代前期の丸館下I遺跡、中期の黒森山麓堅穴群遺跡、後期の草木A遺跡、小黒森遺跡などがある。

2節 史跡の概要

名 称	特別史跡 大湯環状列石
所 在 地	秋田県鹿角市十和田大湯字野中堂、字万座、字一本木後口
指定年月日	史跡指定 昭和26年12月26日(名称 大湯町環状列石) 特別史跡指定 昭和31年 7月19日 昭和32年 7月31日(名称変更 大湯環状列石) 昭和49年 1月23日(追加指定及び一部指定解除) 平成 2年 3月 8日(追加指定) 平成 6年 1月25日(追加指定) 平成13年 8月13日(追加指定) 平成27年 10月 7日(追加指定)
指 定 面 積	250,060.60m ² (平成29年3月末時点)
管 理 団 体	鹿角市
概 要	特別史跡大湯環状列石は、万座環状列石と野中堂環状列石の2つの環状列石を主体とする縄文時代後期前～中葉の大規模な遺跡である。

3節 沿革・指定

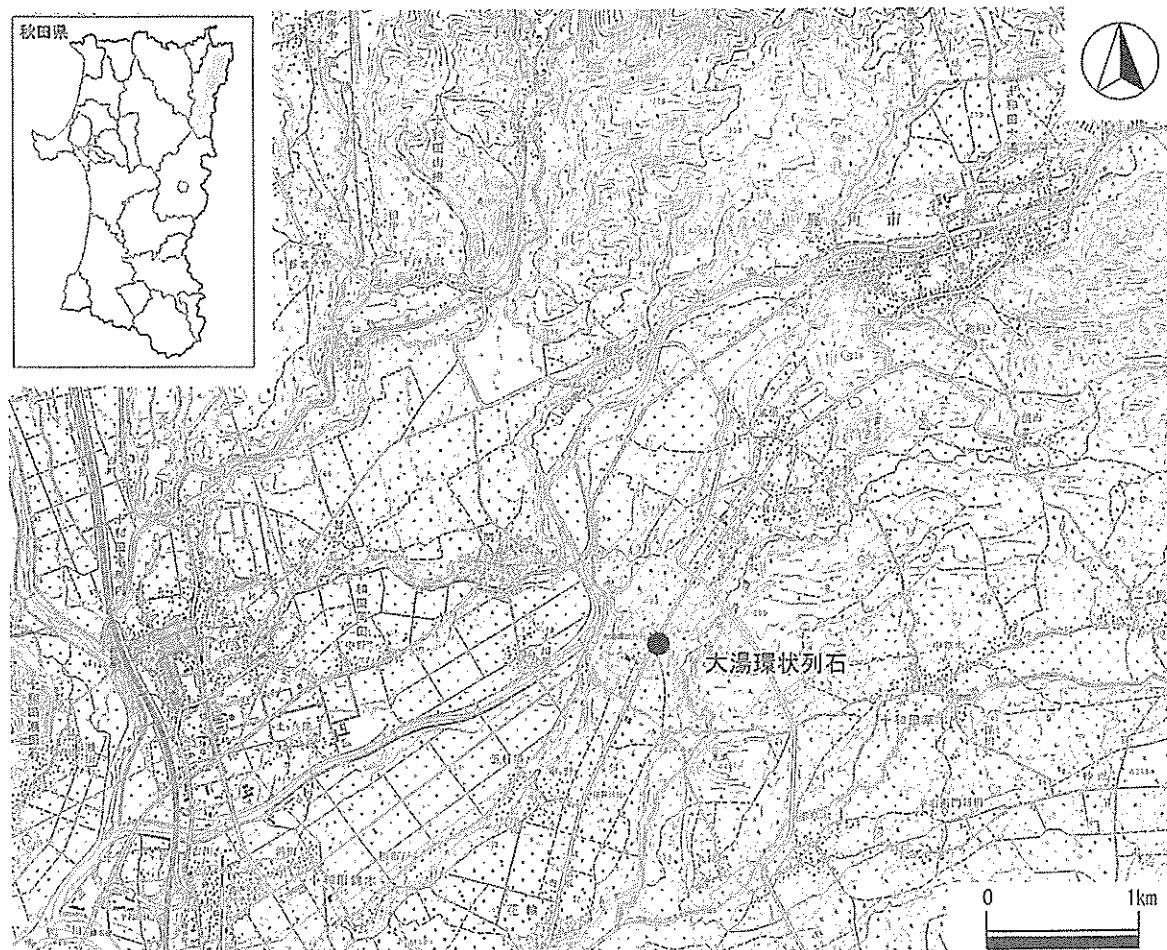
大湯環状列石は、昭和6年に発見され、昭和26～27年に文化財保護委員会(現 文化庁)により発掘調査が行われる。

昭和25年6月30日に秋田県によって史跡に仮指定され、翌年12月26日に「大湯町環状列石」の名称で国史跡に指定される。昭和31年7月19日には特別史跡に指定された。

昭和48年に秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会により緊急分布調査、翌49～51年には詳細分布調査が実施された。この成果に基づき、昭和53年3月「特別史跡大湯環状列石保存管理計画書」を策定した。市教育委員会では遺跡の解明のため、昭和59～平成元年に大湯環状列石周辺遺跡発掘調査、平成2、3年には大湯環状列石発掘調査、平成4～20年には特別史跡大湯環状列石発掘調査を実施した。

また史跡の環境整備を推進するため平成元年度には環境整備事業検討委員会を設置し、平成4

年3月に「特別史跡大湯環状列石環境整備基本計画」を策定し、以降4期にわたる環境整備を平成28年3月まで実施した。



第1図 大湯環状列石の所在地

第2章 環境整備事業に至る経緯

大湯環状列石は昭和48年に秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会により緊急分布調査、翌49年から51年に詳細分布調査が実施され、史跡の範囲が広範囲に及ぶことが確認された。その結果をもとに昭和53年3月に「歴史広場としての公開による学術振興」「環境保護整備の具現化と実施」「施設の設置と教育作用の強化」を柱とする『特別史跡大湯環状列石保存計画書』を策定した。平成元年より環境整備事業検討委員会を設置し、整備の基本方針について協議を行い、平成4年3月に『特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想』を策定した。

平成7年2月には基本構想を受け、より具体化した『特別史跡大湯環状列石環境整備基本計画』を策定した。

平成10年3月に第I期環境整備計画の基本設計を作成し、地方拠点史跡等総合整備事業に採択されたことより、同年4月より第I期環境整備に着手した。

1節 基本構想

平成4年に策定した『特別史跡大湯環状列石 環境整備基本構想』の概要は下記のとおり。

1. 基本理念

(1) 保存

史跡の情報を後世に継承していくため、遺跡・遺構の保存、周辺環境の保存を十分に考慮する。また、遺物の保存、関連資料の収集に努める。

(2) 調査・研究

史跡の学術的、歴史的特色を正しく把握するため、環状列石を中心とした調査・研究に努める。

(3) 学習・活用

誰にでもわかりやすく、正しく理解できるような史跡整備、博物館展示に努める。また、レクリエーション的要素を兼ね揃えたものとし、多くの人に親しまれ、育まれる環境の創出を目指す。

2. 指針

- (1) 万座・野中堂環状列石の自然的要因によるこれ以上の変容を防ぐ保護対策を講ずる。
- (2) 万座・野中堂環状列石周囲に分布する建物跡や土坑などは列石と直接に関連する遺構であり、環状列石の構造・性格を理解する上で重要である。環状列石との位置関係、各遺構の規模・性格が分かるような整備を行う。
- (3) 環状配石遺構や一本木後口配石遺構群などは、環状列石の性格や変遷を考える上で貴重な遺構であり、これらについても整備を行う。
- (4) 環状列石を作った縄文人の生活や文化を視覚的に理解できるように縄文時代のムラ(集落)を復元する。
- (5) 自然環境に大きく依存していた縄文社会を実感できるように、遺構保存に留意しながら縄文時代の植生の復元に努める。
- (6) 史跡を総合的に理解する施設として、博物館を建設する。また、この博物館を史跡の管理、調査・研究の拠点とする。

2節 基本計画

平成7年に策定した『特別史跡大湯環状列石 基本計画』の概要は下記のとおり。

1. 目的

この計画は基本構想を受けたものとして、計画対象地全体に関わる整備方針を検討する全体計画の位置づけである。

- (1) 計画地全体に関わる土地利用及び施設設置の基本的方針を定める。
- (2) 当面の整備範囲に定められた 105,000 m²の整備について、具体的な内容を策定する。
- (3) 史跡の活用方策についての検討を行う。

2. 整備のテーマと基本方針

環状列石は縄文時代の人々の精神的な世界を反映したものと考えられ、その内的な世界を「宇宙」と表し、整備の基本テーマを「縄文人の宇宙」とした。

(1) 縄文人の宇宙を体感

- ① 円環状に構成された遺跡の構造と広がりが感じ取れ、縄文時代の祈りの場としての雰囲気を体感できる環境整備を行う。
- ② 縄文をテーマにした祭りや縄文の音楽を使った演奏会など、縄文の世界を体験できるイベントを実施する。

(2) 縄文人の宇宙を知る

- ① 遺跡の紹介を中心に、縄文人の世界と宇宙について展示する施設を設置する。
- ② 講座・講習・シンポジウムなどを企画・実施し、遺跡を知り学べる場とする。
- ③ 日本を代表する遺跡の一つとして世界の環状列石の紹介を行うとともに、外国語によるパンフレットの配布など国際的にも理解が得られる展示・普及活動を行う。

(3) 縄文人の宇宙に触れる

- ① 縄文の生活文化や自然に根差した教育プログラムを開催・実施し、体験学習が行える場とする。
- ② 体験学習を開催するため、拠点となる体験学習施設を設置する。

(4) 縄文の宇宙に遊ぶ

- ① 史跡を舞台に、来訪者が憩い遊べる環境作り及び運営体制の検討を行う。

3. 土地利用ゾーニングと施設配置

土地利用では発掘調査により遺構が検出される地域は、遺構を中心に縄文時代の景観や雰囲気が感じられる整備を行い、遺構の分布が不明な地域は地下遺構に影響を与える見学者が憩い楽しめる広場的な整備を行う。また、施設の配置は必要最小限にとどめ、展示施設・体験学習施設などは特別史跡指定地外にまとめて配置する。

(1) A環状列石ゾーン

万座・野中堂環状列石が位置する。両環状列石の整備を行い、縄文人の宇宙を体感する中心ゾーンとする。

環状列石ができる限り自然に見せることを第一に考えた施設配置とする。環状列石及びその周囲の遺構分布域には原則園路、説明看板など現代的な施設は設置しない方針とする。

(2) B縄文のムラゾーン

竪穴住居跡、落とし穴などが検出された地域である。縄文時代の村の姿を再現し、縄文人

の宇宙や生活に触れるゾーンとする。

竪穴住居、落とし穴などのほか、説明板・案内板などのサインを設置し、利便施設など現代的な施設は極力設置しない方針とする。

(3) C万座配石遺構群ゾーン

配石遺構群が検出された地域である。配石遺構群の整備によりA環状列石ゾーンと密接に関連しながら縄文人の宇宙を体感するゾーンとする。

遺構整備を行うほかのゾーンと同様にできる限り自然に配石遺構をみせることを第一とした施設配置とする。広場から環状列石への動線を確保する園路を外縁に通す以外は施設の配置はしない。

(4) D一本木後口配石遺構ゾーン

一本木後口配石遺構が検出された地域である。環状列石より離れた位置に独立的に存在する。遺構の整備を行い、縄文人の宇宙を体感しつつ自然に触れ遊ぶゾーンとする。

現代的な施設の配置を極力抑え、遺構から距離を置くよう園路を外縁に通す。

(5) E・F広場ゾーン

Eは万座配石遺構の西側に隣接し、Fは野中堂環状列石の南側に隣接する。ともに発掘調査が行われていないため当面は広場的な整備を行い、自然に親しむゾーンとする。

地下遺構の保存を図りつつ多目的に利用できる広場的な施設配置を行う。園路は外縁部に回し、中央部は広場として憩いの場やイベントを行う場とする。

(6) G施設ゾーン

特別史跡指定地外でガイダンス施設・展示施設と出土文化財管理センターの建設予定地域である。駐車場も併せて設置する。

4. 整備工事の計画

計画範囲が105,000m²(当時)に及ぶことから、整備は4期に分けて実施する。

(1) 第Ⅰ期

史跡の環境整備及びガイダンス施設の設置、第Ⅰ期内で必要と思われる範囲の駐車場整備を行う。

(2) 第Ⅱ期

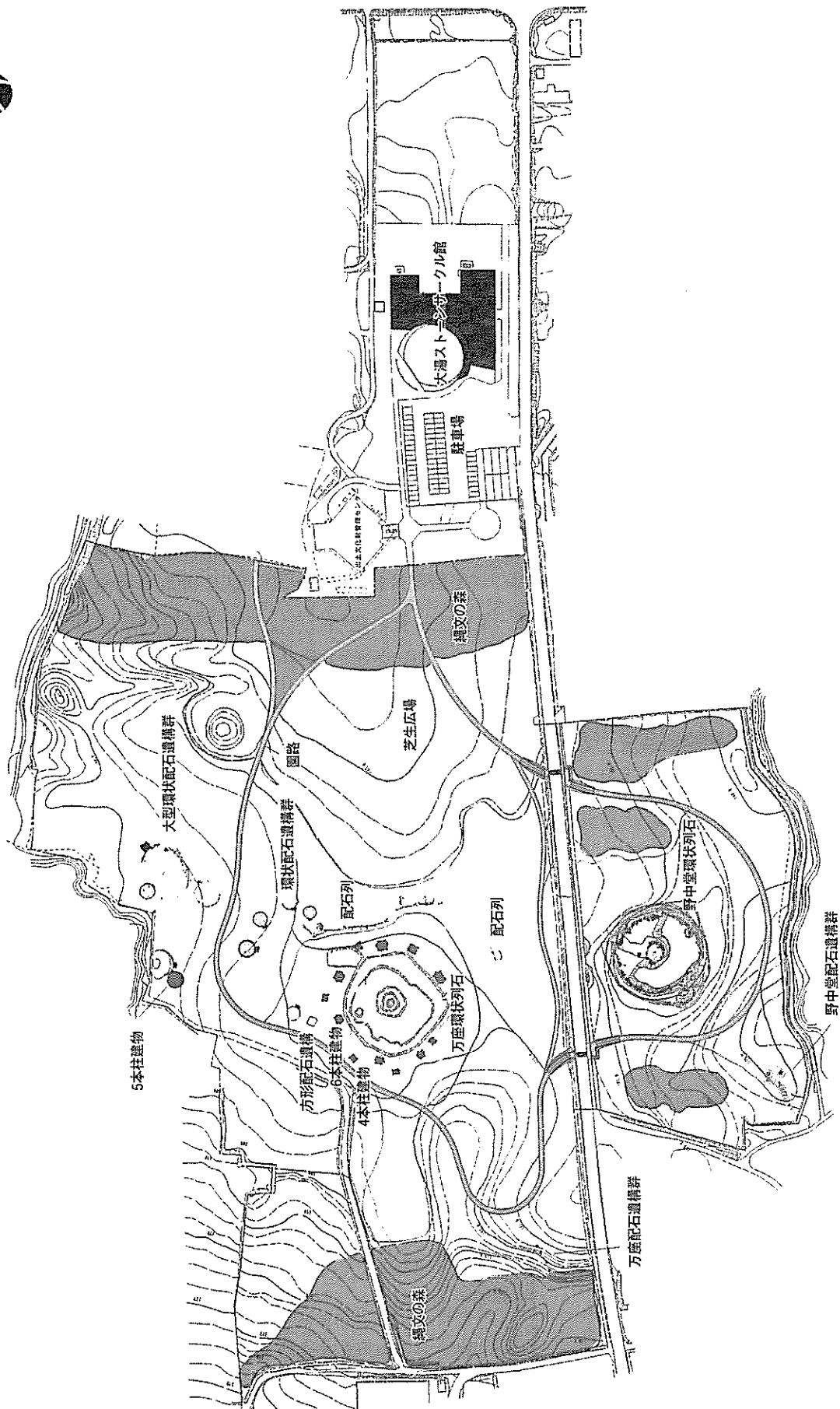
展示施設・体験学習施設の建設及びGゾーンに関わる整備を行う。

(3) 第Ⅲ期

Dゾーン(一本木後口配石遺構)の整備を行う。

(4) 第Ⅳ期

E・Fゾーン(広場)の整備を行う。



第2図 特別史跡大湯環状列石環境整備事業全体図

第3章 発掘調査の概要

1節 これまでの発掘調査

大湯環状列石は昭和17年の神代文化研究所、同21年朝日新聞社後援の調査を経て、同26・27年に文化財保護委員会(現 文化庁)により発掘調査が行われる。昭和48年から51年にかけて、秋田県教育委員会、鹿角市教育委員会により大湯環状列石と関連ある遺構(大湯環状列石周辺遺跡)の範囲確認を目的とした分布調査が行われた。

昭和59年より史跡整備計画策定のため調査を実施し、平成4年度より史跡の環境整備基本計画策定のため「特別史跡大湯環状列石発掘調査」を平成20年度まで実施した。詳細については『特別史跡大湯環状列石環境整備事業報告書』(平成15年3月刊行)及び各発掘調査報告書を参照いただきたい。

第1表 発掘調査の経過と成果

年度	調査区	面積(㎡)	成果	報告書
昭和59年	史跡北東側(A1区)	1,825	配石遺構9基検出。配石下に土坑が伴うことが判明。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(1)』 昭和60(1985)年3月
昭和60年	史跡北東側(A2区) 野中堂東側隣接地 (B1区)	1,870	A2区では15基の配石遺構検出。うち2基の配石下から土器棺(甕棺)を検出。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(2)』 昭和61(1986)年3月
昭和61年	史跡北東側(A3区) 万座東側(C1区)	2,039	A3区では配石を確認。二重の弧状に配置する。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(3)』 昭和62(1987)年3月
昭和62年	万座北西側隣接地 (D1区) 史跡北東側(E1区)	2,347	D1区では建物跡19棟、環状配石遺構3基などを検出。列石に接して遺構が規則的に分布することを想定。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(4)』 昭和63(1988)年3月
昭和63年	万座西側隣接地 (D2区)	1,576	建物跡11棟、フラスコ状土坑25基などを検出。列石をまわるように規則的に遺構が分布することが確定。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(5)』 平成元(1989)年3月
平成元年	史跡北北西側台地縁 (F1区) 万座北東側(E4区)	1,648	F1区より竪穴住居跡、建物跡4棟検出。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(6)』 平成2(1990)年3月
平成2年	万座北北東側 (F2区)	2,810	建物住居跡1棟、Tピット群を確認。住居群の東端を確認。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(7)』 平成3(1991)年3月
平成3年	万座南側(G2区)	1,519	昭和38・39年(阿部義平氏による)に確認された配石遺構群を確認。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(8)』 平成4(1992)年3月
平成4年	万座北西側 (D5区・F3区)	2,736	環状配石遺構を検出。環状配石遺構が広範間に広がることが判明。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(9)』 平成5(1993)年3月
平成5年	万座北西側隣接地 (D3・D4区)	3,180	建物跡、石列を検出。列石をまわるように遺構が規則的に分布する。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(10)』 平成6(1994)年3月

年度	調査区	面積(m ²)	成果	報告書
平成 6 年	万座東側隣接地 (D6 区)	2, 656	建物跡、プラスコ状土坑を検出。列石をまわるように遺構が規則的に分布する。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(11)』 平成 7(1995)年 3 月
	史跡北東側(史跡指定外)	1, 520	土坑 3 基、T ピット 2 基を検出。史跡指定外地に遺構が分布することが判明。	※出土文化財管理センター建設に伴う発掘調査
平成 7 年	万座南東部隣接地 (D7 区)	3, 176	建物跡、プラスコ状土坑などを検出。列石をまわるように遺構が規則的に分布する。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(12)』 平成 8(1996)年 3 月
平成 8 年	万座北西側(F4 区)	3, 878	弧状に配置された建物跡、大規模な環状配石遺構を検出。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(13)』 平成 9(1997)年 3 月
平成 9 年	史跡北端(F5 区)	3, 410	列石と関連する遺構の広がりを確認。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(14)』 平成 10(1998)年 3 月
平成 10 年	万座南側隣接地 (D8 区)	4, 503	D8 区の調査で万座環状列石の外側に遺構が規則的に分布することが判明。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(15)』 平成 11(1999)年 3 月
	万座南側(G2 区)			
	史跡北西端(F6 区)			
平成 11 年	万座環状列石(D 区) 野中堂周辺地域 (B 区)	3, 910	野中堂環状列石を中心に遺構が広範囲に広がることを想定。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(16)』 平成 12(2000)年 3 月
平成 12 年	野中堂南西側隣接地 (B3 区)	2, 745	建物跡、プラスコ状土坑を検出。万座同様遺構が規則的に分布することを想定。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(17)』 平成 13(2001)年 3 月
	史跡北東側 (史跡指定外)	931	プラスコ状土坑を検出。史跡指定外地に遺構が分布することが判明。	※(仮称)体験学習館建設に伴う発掘調査
平成 13 年	野中堂南側隣接地 (B3 区) 野中堂南側(B4 区)	663	隣接地から竪穴住居跡が検出。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(18)』 平成 14(2002)年 3 月
平成 14 年	万座西側台地縁 (D9 区) 万座南西側(G3 区)	1, 545	西側台地縁から列石と関連する竪穴住居跡 9 棟検出。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(19)』 平成 15(2003)年 3 月

2節 環境整備に伴う発掘調査

第Ⅰ期環境整備では遺跡の解明とともに遺跡の広がりや遺構の分布状況を把握し、保存・整備の方法を検討するため万座・野中堂環状列石周辺の発掘調査を行った。第Ⅱ期・第Ⅲ期にかけて、遺跡の解明に合わせて、保存・整備を検討するため発掘調査を行った。

◇平成15年度

- ・万座環状列石西側台地縁辺部(G4区)。面積1, 485m²

縄文時代の遺構は竪穴建物跡2棟、焼土遺構19基、柱穴状ピット15個、Tピット2基、フ拉斯コ状土坑1基、土坑6基、礫群3ヶ所を確認した。平安時代の遺構として焼土遺構が5基検出した。

遺構内外で復元可能な縄文土器6個体分、縄文土器片638点、須恵器片1点、石器59点、剥片52点、土製品10点、石製品3点が出土した。なお、須恵器片以外は縄文時代のものと推測される。

◇平成16年度

- ・万座環状列石南西側台地縁辺部(G5区)。面積770m²

縄文時代の遺構は土坑4基、焼土遺構5基、柱穴状ピット3基を確認し、平安時代の遺構は溝状遺構1条を確認した。

遺構内の遺物の出土は確認されなかったが、遺構外より縄文土器片36点、石器3点が出土し、縄文土器片は縄文時代後期初頭から中葉のものと考えられる。

◇平成17年度

- ・野中堂環状列石東側(A4区)。1, 492m²

縄文時代の遺構は配石遺構13基、土坑1基、焼土遺構40基を確認した。平安時代前半以前と考えられる道路状遺構1条が検出している。

遺構内の遺物の出土は確認されなかったが、遺構外より縄文土器破片307点、石器6点が出土し、土器片は縄文時代初頭から中葉のものと考えられる。石器は石鏃4点、搔器1点、石皿1点である。ほかに土器片利用土製品が4点出土している。

- ・野中堂環状列石東側(A5区)。53m²

縄文時代の焼土遺構1基を確認した。遺構内の遺物の出土はなく、遺構外より縄文土器片1点が出土した。

◇平成18年度

- ・野中堂環状列石東側(A6区、A7区)。面積1, 340m²

縄文時代の遺構は配石遺構3基、焼土遺構22基が確認された。平安時代前半構築と考えられる竪穴住居跡3棟が検出した。

遺構内では竪穴住居跡から土師器片(甕、壺)などが出土した。遺構外では縄文土器片1, 099点、石器26点が、弥生土器片387点が出土した。石器は搔器7点、凹石1点である。

◇平成19年度

- ・野中堂環状列石南側(H1区)。面積1, 300m²

縄文時代の遺構は配石遺構3基、石列1条、焼土遺構1基を確認した。

遺構内での遺物は確認されなかったが、遺構外では縄文土器片83点、石器20点が出土した。縄文土器片は縄文時代後期と推定される。石器は石鏃2点、搔器7点である。

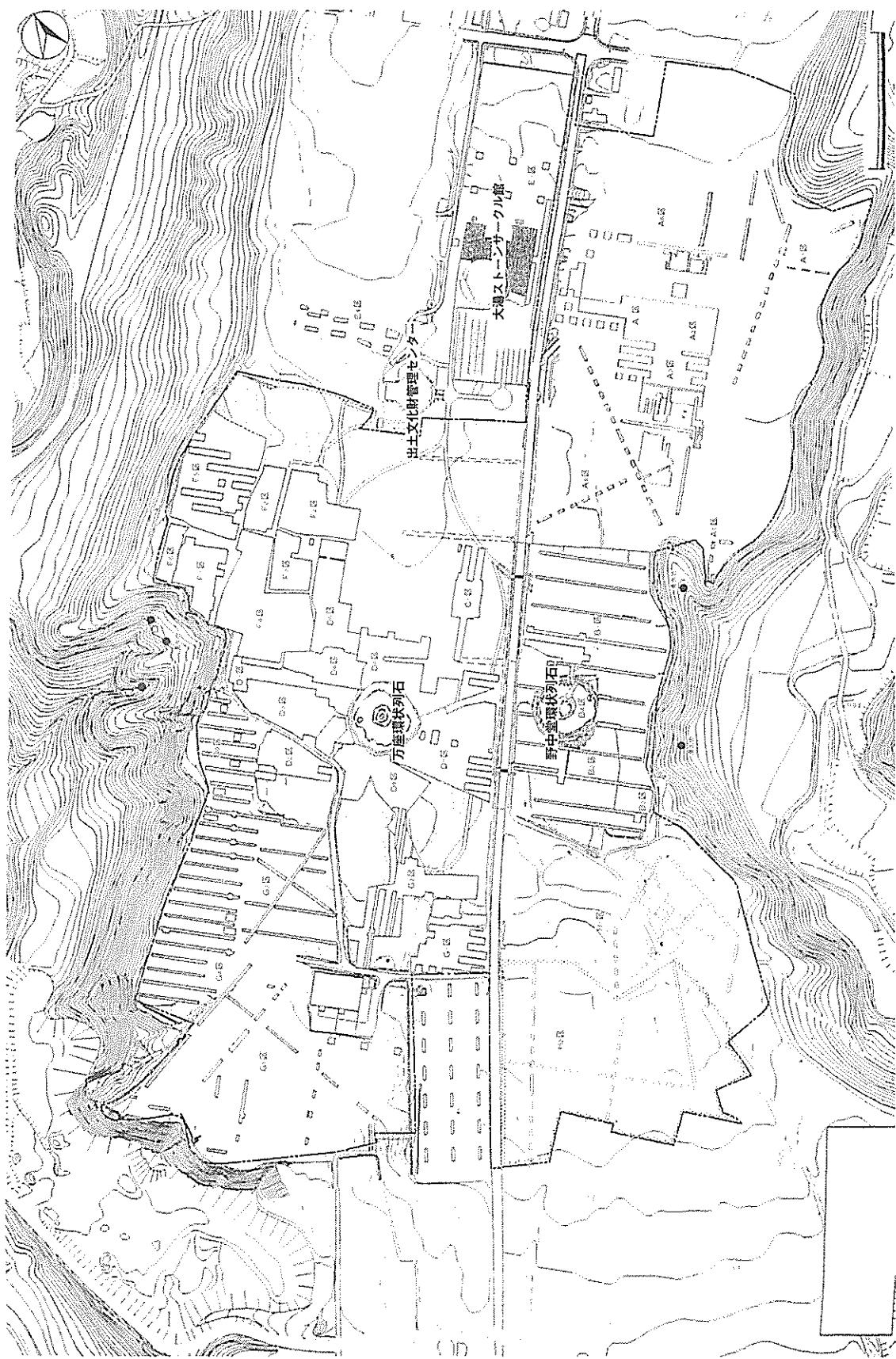
◇平成20年度

- ・野中堂環状列石南側(H2区)。面積560m²。

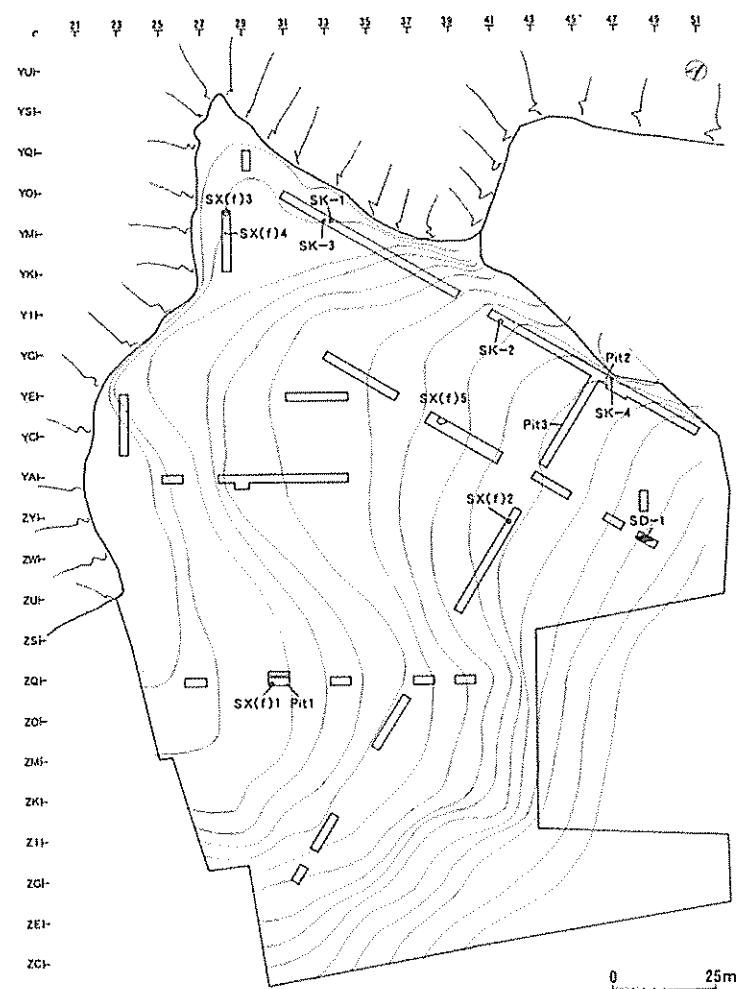
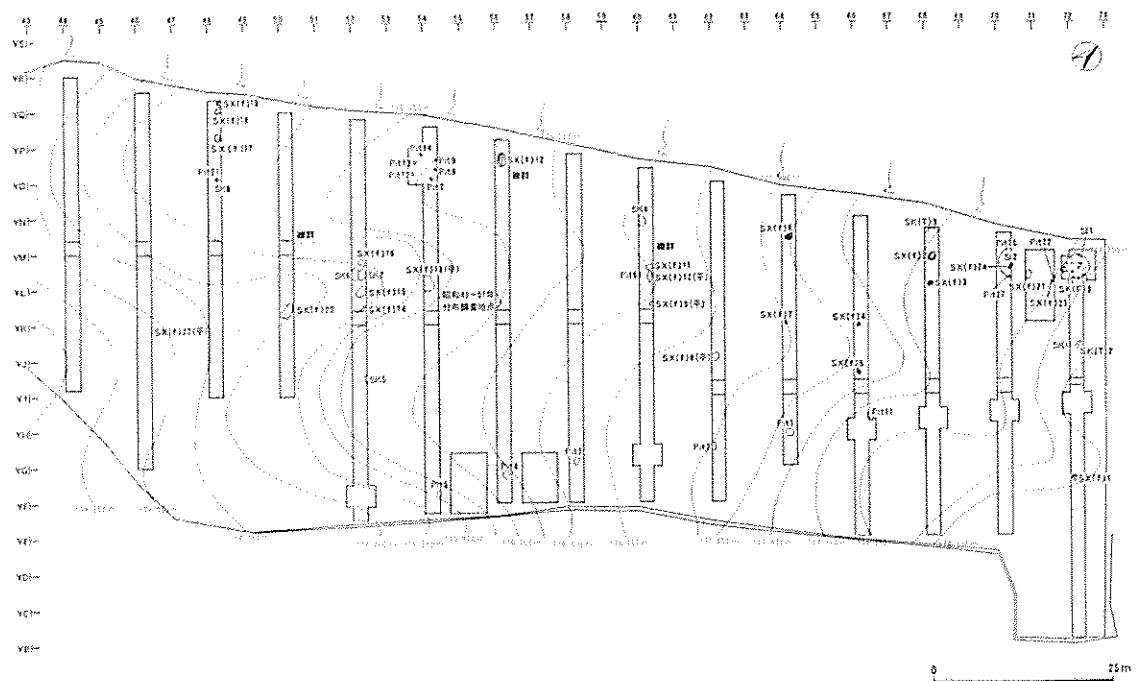
遺構は検出されなかったが、縄文土器片103点が出土した。縄文時代後期のものと推定される。

第2表 第Ⅱ期・第Ⅲ期の発掘調査の経過と成果

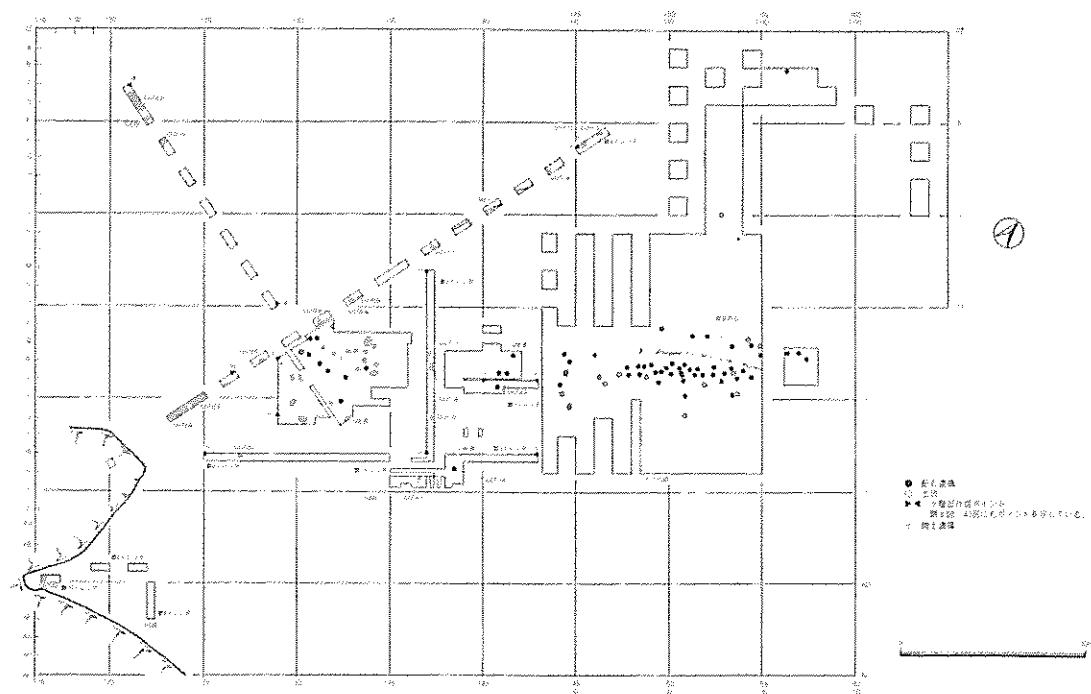
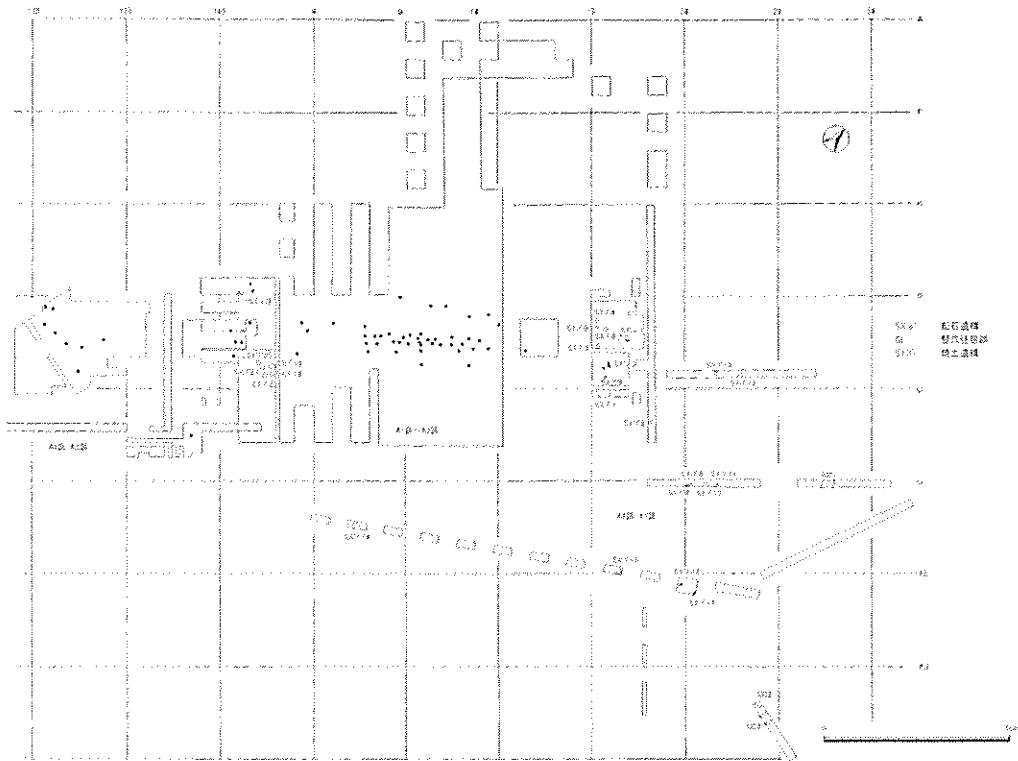
年度	調査区	面積(m ²)	成果	報告書
平成15年	史跡西側台地縁 (G4区)	1,485	D9区(平成14年度調査区)で検出された西端を確認、3本一組の柱列を検出。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(20)』 平成16(2004)年3月
平成16年	史跡西側台地縁 (G5区)	770	史跡西端部では遺構の分布が極めて薄くなることを確認。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(21)』 平成17(2005)年3月
平成17年	史跡東側 (A4区・A5区)	1,546	配石遺構13基を検出。一本木後口配石遺構群とは別個のものと判明。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(22)』 平成18(2006)年3月
平成18年	史跡東側 (A6区・A7区)	1,340	配石遺構3基を検出。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(23)』 平成19(2007)年3月
平成19年	史跡南側 (H1区)	1,300	野中堂の南側出入口の延長線上から配石遺構、石列を検出。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(24)』 平成20(2008)年3月
平成20年	史跡南側 (H1区)	560	対象地全体をボーリング探査したが、遺構の検出はなかった。	『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(25)』 平成21(2009)年3月



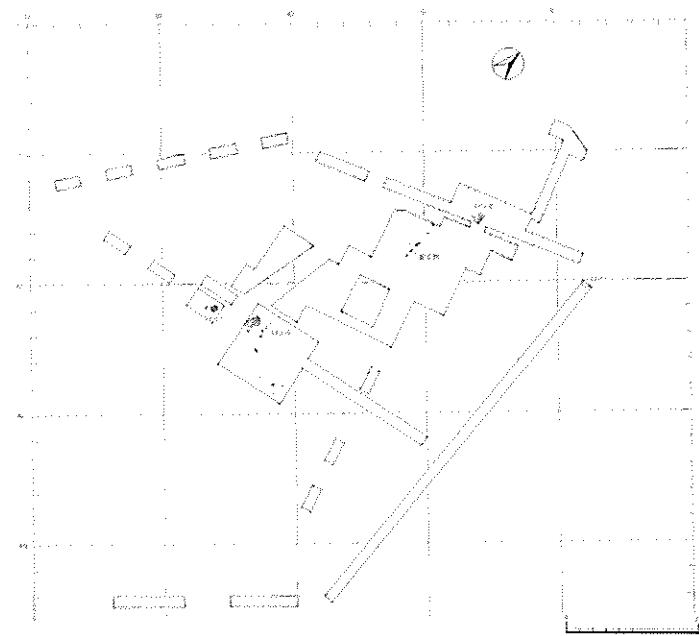
第3図 発掘調査地区全体図



第4図 発掘調査地区（1）（上：G4区、下：G5区）



第5図 発掘調査地区（2）（上:A1区～A7区 下:A4区・A5拡大図）



第6図 発掘調査地区（3）（上：H1区、下：H2区）

第4章 環境整備事業の概要

1節 第I期環境整備

1. 整備事業

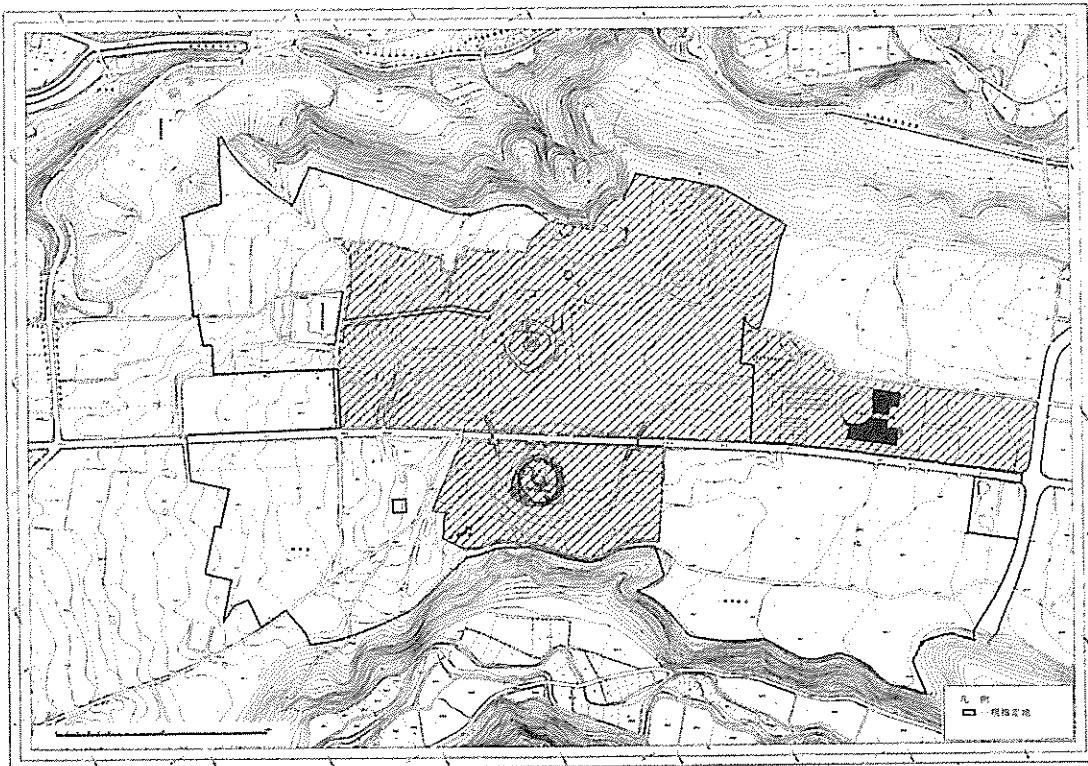
大湯環状列石環境整備事業検討委員会で検討した結果、復元的整備として環状列石の復元と保存処理、配石遺構と掘立柱建物跡の復元、縄文時代の地形・自然環境の復元を行い、体験学習施設・情報提供施設として大湯ストーンサークル館の建設を行った。詳細については『特別史跡大湯環状列石環境整備事業報告書』(平成15年3月刊行)を参照いただきたい。

(1) 事業対象面積

特別史跡内	107,088.48 m ²
指定外地(施設配置地)	22,032.00 m ²

(2) 事業目的

特別史跡大湯環状列石は、2つの環状列石を特色とする縄文時代の代表的な遺跡である。この貴重な文化遺産を保存し、正しく後世に継承するとともに、積極的に活用するため、史跡整備及びストーンサークル館の建設を行った。



第7図 第I期環境整備地区

2. 遺跡環境整備内容

(1) 環状列石の復元

遺跡の発見から70年以上がたち、石の転倒・移動・埋没が進んでいた組石それぞれを、昭和28年発行の報告書『大湯町環状列石』の図面・写真、文章をもとに昭和28年当時の状況に復元を行った。また、経年により環状列石の石材に汚れがあるため、洗浄・接着(クラック修復)・強化撥水加工、防カビ・防藻処理を施した。

(2) 配石遺構の復元

万座環状列石に隣接する配石遺構は露出展示と、自然石を用い実物の真上に復元整備したものがある。露出展示は万座環状列石に近傍する方形配石遺構1基、環状配石遺構1基であり、これらは昭和61年以降の発掘調査で検出され、劣化等はないが、環状列石同様に強化・撥水処理を行っている。

復元した配石遺構は万座環状列石の北側に位置する、大型環状配石遺構1基、環状配石遺構8基、方形配石遺構1基と、北東側及び東側に位置する配石列3条、万座配石遺構群を構成する配石遺構4基、野中堂配石遺構群を構成する配石遺構3基、石列1条である。復元は石材実物の上に下層から保存用の盛土・碎石・砂・バーク堆肥を敷き、実測図を元に、同種類の実物に近い大きさ・形状の石材を据え置いている。遺構の周辺には張芝し、一部遺構には柱表示を行った。

(3) 掘立柱建物の復元

掘立柱建物は万座環状列石の周囲を主に復元している。万座環状列石の周囲からは4本柱の建物跡20棟、6本柱の建物跡31棟が検出されているが、環状列石の完成期に建てられたと考えられる12棟(4本柱建物6棟、6本柱建物6棟)は盛土を施し、復元している。そのうち4棟は環状配石遺構の保存上復元困難などの理由から平面表示(高さ20cm程度の柱表示など)としている。

復元した掘立柱建物は、屋根は竪穴住居跡の屋根の形状や北海道の栄浜1遺跡(八雲町・縄文時代中期)から出土している家形石製品を参考に寄棟とし、床は全ての建物跡を高床にする根拠が薄いことから平地式としている。なお、建物の壁の復元は行っていない。

ほかに万座環状列石の北西側台地縁辺部で検出された五角形に配置された柱穴とそれを囲むように配置された壁柱穴は柱表示(主柱300cm、壁柱150cm)で復元している。

(4) 環境復元

環境復元では縄文時代の地形・自然状況を再現するため、地形復元工事と植栽工事を行った。

地形復元工事では、発掘調査により沢が複雑に入り込み、小丘が点在することが判明しており、遺構の保護のため50cm盛り土をした上で、縄文時代の地形へ復元を行った。

樹木植栽は発掘で検出されている炭化堅果類や花粉分析をもとに、22種類の樹種を選定し、万座環状列石北側・南西側、野中堂環状列石周辺に重点的に植栽を行った。また野芝張りを万座環状列石北側、両環状列石周辺に行っている。

(5) その他

史跡入り口から両環状列石を大きく一周する園路を設け、案内板を設置した。また、環状

列石には保護柵を設け保護している。ほかに保護柵は県道沿い・民有地との境に設置した。
野中堂環状列石隣接地には昭和12年に大湯郷土研究会により建立された「先住民中通遺蹟」の石碑と昭和28年に文化財保護委員会(現 文化庁)により建立された「特別史跡大湯町環状列石」の石柱が立っていたが、史跡入り口に移設し、保存処理を行った。
雨水処理のため、県道沿いに木製水路と沢部の遺構がない部分には地下浸透柵を設置した。

3. 大湯ストーンサークル館建設

史跡のガイダンス、体験学習、史跡管理機能をもつ施設として、平成12年から13年度にかけて建設した。

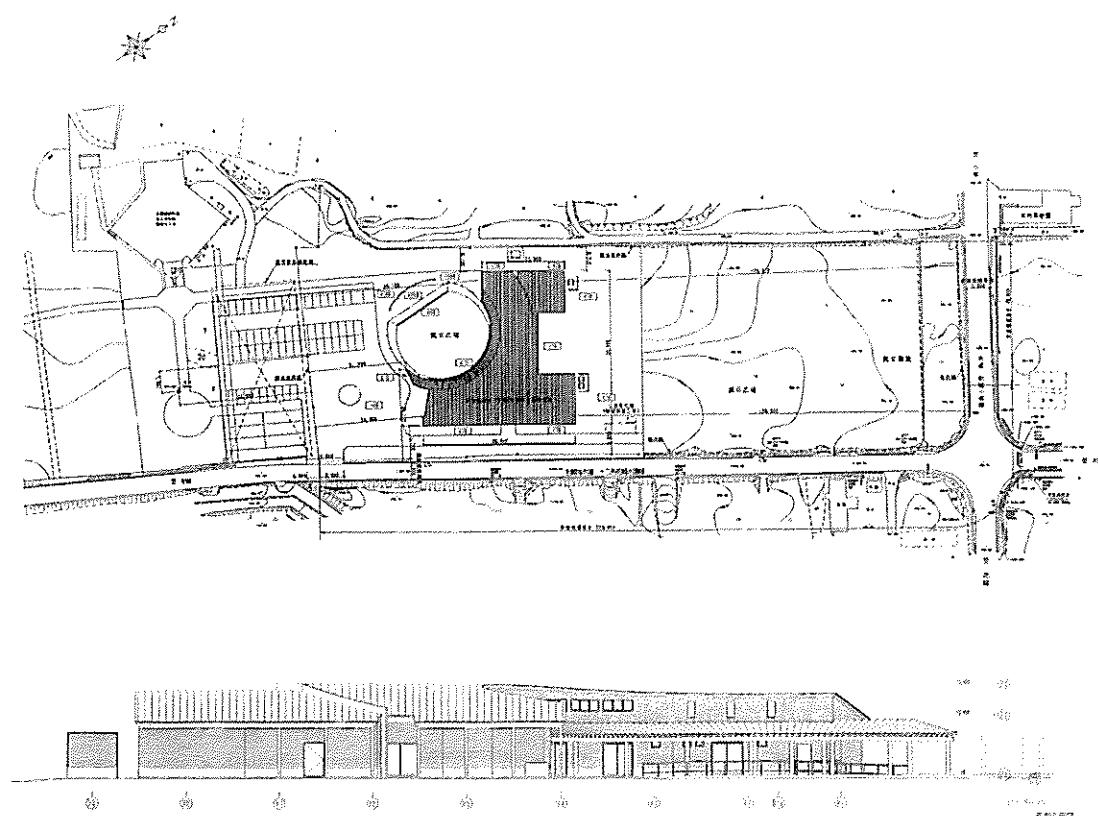
(1) 規模 延べ床面積 1,164.43m²

建築面積 1,557.75m²

(2) 構造 木造・平屋建て

(3) 展示

発掘調査で得られた成果の展示のほか、縄文時代の精神文化を広く世界に紹介する。



第8図 ストーンサークル館（上：配置図 下：館外観）

2節 第Ⅱ期環境整備

1. 第2次基本計画

(1) 基本的な考え方

① 世界遺産登録を目指す発信拠点

環状列石は北海道から東北に分布し、縄文時代の精神文化を示す貴重なものである。また、ストーンヘンジ(イギリス)をはじめとするヨーロッパの同時代の配石遺構を有する遺跡との比較研究を行い、世界文化遺産登録に向け一連の関連遺跡と連携を図りその存在を世界に向けて発信する。

② 環状列石の調査・研究拠点

史跡の未調査地域の継続した調査・研究を行う。同時に周辺遺跡の調査を行い、環状列石と集落の関係を明らかにする。

また、北海道南部から東北地方北部に分布する環状配石遺構の中核的史跡である大湯環状列石と関連する遺跡と連携し世界文化遺産登録を目指した調査・研究を行う。

③ 地下遺構の保存と保護

地下に埋蔵される遺構や遺物などを保存・保護することを整備の第一目標とし、整備を行う地域は遺構面から整備面まで十分な保存盛土を行う。特に遺構上部に復元などを行う場合は地質調査などを行い、地盤の地耐力を考慮し盛土厚を決定する。また高木などを植栽する場合は根が地下遺構に影響を与えないよう留意する。

④ 歴史的環境の創出

史跡からは周辺の山々を眺望することができ、木々に囲まれた自然景観を好んで生活をしていた場所と推測され、整備を行う上で、縄文時代の原風景的な景観を保全するとともに、現代的な建物などが視界に入らないよう計画し歴史的環境を創出する。

⑤ 活用拠点としてのストーンサークル館活動

世界に向け発信するためホームページを充実させPRする。史跡の活用により、地元の「まちづくり」や産業と連携し、市全体のネットワークの中で活用を図る。

(2) 基本方針

- ① 整備対象地全域を遺構公開ゾーン(遺構調査終了地域・発掘調査予定地域)と遺構保存ゾーン(修景地域)にわけ環境整備を実施する。
- ② 未整備の遺構公開ゾーンは調査計画に基づき発掘調査を行い、その成果に応じて保存・整備・公開・活用の方法を検討し、整備を行う。
- ③ 遺構保存ゾーンは、遺構の分布状態が不明なため地下に影響を与えない方法で修景のみの環境整備を行う。
- ④ 史跡に隣接する斜面や周辺に分布する関連遺構については、分布調査等を実施し、その保存・活用を検討する。
- ⑤ 遺跡を分断する県道については、関係機関と協議を続ける。
- ⑥ 万座環状列石に隣接する敷地の公有地化を図る。
- ⑦ 第Ⅱ期整備予定地と第Ⅳ期整備予定地の間の敷地の公有地化を測る。

⑧ ハードな計画と合わせ遺跡活用を主としたソフト計画の立案を図る。

2. 対象位置・面積

万座環状列石の南西側 約35,000m²(33,264m³)

3. 整備工事概要

(1) 基本設計

① 遺構保存整備の方針

◇ 遺構保存

整備対象地の遺構は現況地盤面よりほぼ25～70cm以下にあり、保護盛土厚を既存の厚さに合わせ、計画地盤高を遺構面(縄文時代当時の生活面)よりほぼ50cm上げた厚さにして、遺構保護を図る。

◇ 遺構表示

D9区及びG4区・G5区で検出された遺構は位置確認に終わっているため詳細な情報を得ていないため遺構表示は行わない。案内板や説明資料などで遺構の存在を示す。G4区で検出された6本の柱列跡(3本1組が2条)を立体的に表示することを検討する。

◇ 地形復元

D9区及びG4区・G5区は既存のD2区及びG3区との連続性があるため発掘調査の成果を基に地形復元を行う。なお、整備予定地は工事により遺構面を破壊しないよう50cm以上の盛土を確保する。

② 環境整備の方針

◇ 植栽計画

出土堅果類や花粉分析の結果を踏まえ、縄文時代に存在したと考えられる樹木の植栽を行う。対象地の西側県道沿い及び北側農面道側に植栽を行い、縄文時代の景観を創出する。樹木植栽地以外は人工的な雰囲気となることを避けるため自然の草地とする。ただし遺構を復元的に表示する部分のみ敷芝とする。

◇ 園路・サイン・その他

園路は対象地を大きく周回するよう設け(園路幅2m)、材料は遺構の保護を考慮し、地表面の掘削が少なく自然な仕上がりに近いものを使用する。案内板・遺構名称板は既存のものと同じ素材・デザインとする。

(2) 整備内容

① 遺跡公開ゾーン(一本木後口配石遺構群)

一本木後口遺構群及びその周辺の発掘調査を行い、成果に基づき整備を行う。一部配石は現代に入り抜き取られたことが判明しているため聞き取り調査を行い、整備に反映させる。

② 遺構保存ゾーン(修景地域)

地下遺構の保存を図りつつ、多目的に活用できる広場的な機能が果たせる整備・植栽(花粉分析に基づく)を行う。

(3) 事業概要

主な事業は次の通り。

① 遺構復元

環状列石と関連が強い柱列の復元を行った。3本1列で、2条復元した。史跡内でも目立つように柱の高さを5mとした。

② 地形復元

発掘調査で得られた情報から縄文当時の等高線を作成し、地形を復元した。遺構構築面や当時の地表面を保護するため50cmの保護層を設けている。整備対象地区の西側は現状のままとし、隣接する畠境で生じた凹凸をなくす程度に整地した。

③ 自然環境復元工事

史跡を取り囲んでいたと思われる森を復元するため、花粉分析や出土炭化堅果類、史跡周辺の自然植生を参考に高木・中木・低木・地被類(ツル物類)25種類1,129本を植栽した。また、園路工事や地形復元を行った個所に部分的に敷芝を施した。

④ 園路工事

◇ 園路整備

第Ⅰ期整備した園路から分岐し第Ⅱ期環境整備地区(史跡西側)を大きく周回する園路を設置した。園路はバークチップ敷とし史跡の景観に考慮している。チップの下にはオイルサンド、砂利を敷きチップが流れても路面がくぼむことがないようにした。

◇ ベンチ

見学時の休憩用に木製ベンチを8基設置した。

◇ その他

雨水処理のため浸透枠設置1基、台地縁に沿って転落防止用に木柵を設置した。

⑤ サイン工事

◇ 方向案内板

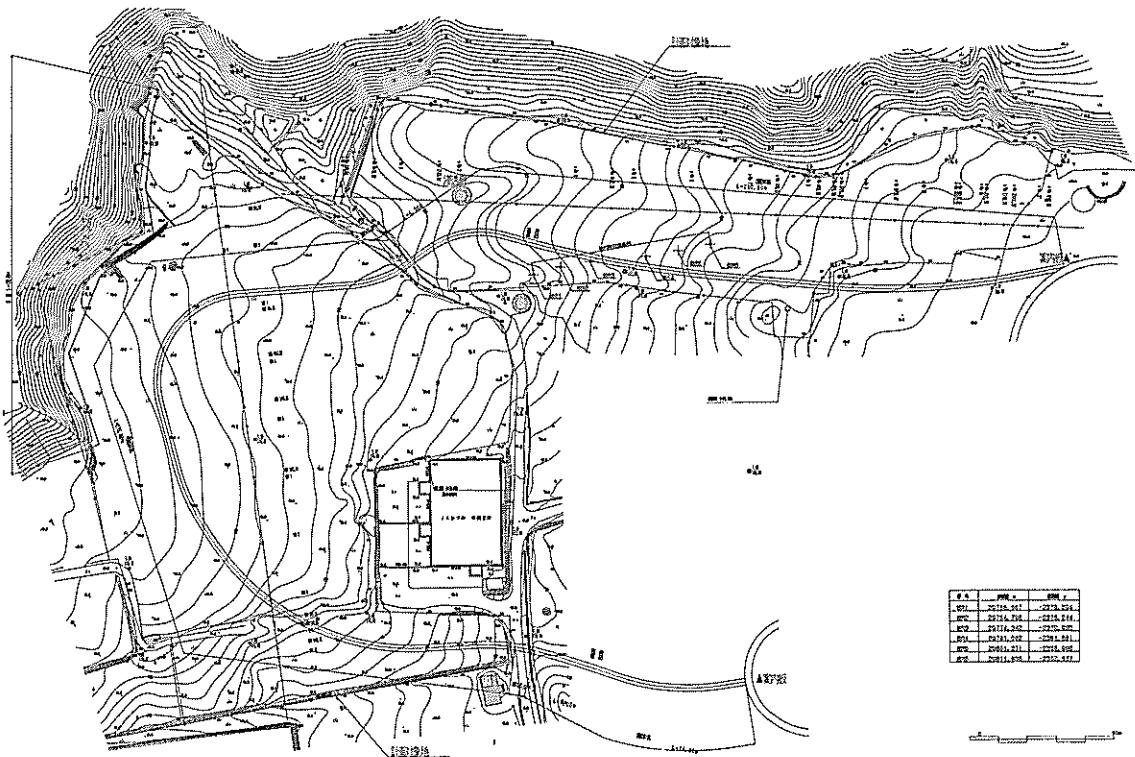
園路の分岐点に2基設置。クラフト陶板製。

◇ 遺構名称板

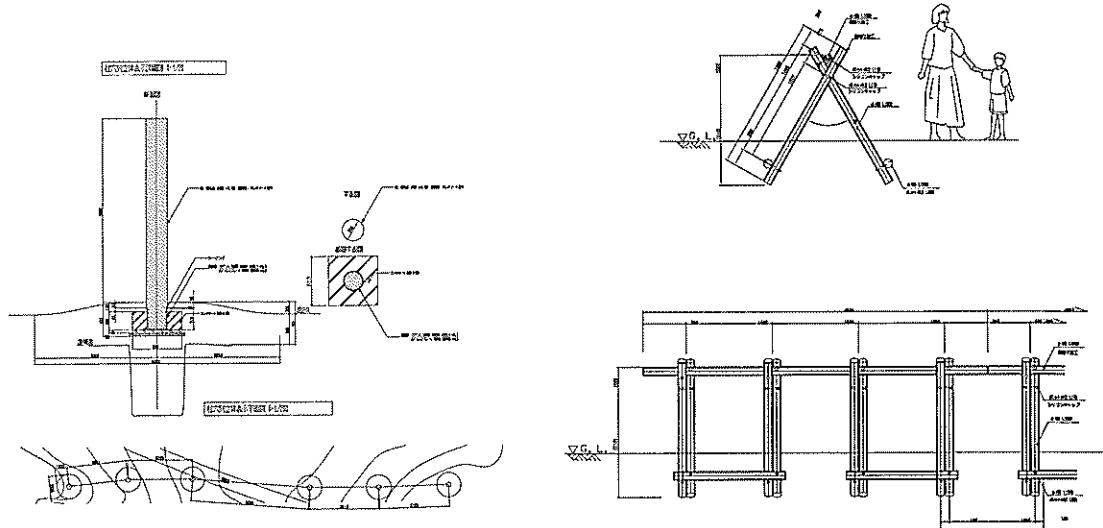
復元した柱列2条の名称板を設置した。

第3表 第Ⅱ期環境整備概要

年度	内容
平成15年	地形測量
平成16年	実施設計
	遺構・地形復元(抜根運搬処分)、園路整備
平成17年	地形復元、浸透枠設置1基、園路整備(園路舗装・張芝1,530m ²)
	方向案内板2基、ベンチ6基、木柵138.0m
平成18年	遺構復元(柱列6本)、自然環境復元(樹木植栽579本、敷芝4,100m ²)
	遺構名称板1基
平成19年	自然環境復元(樹木植栽1,129本)



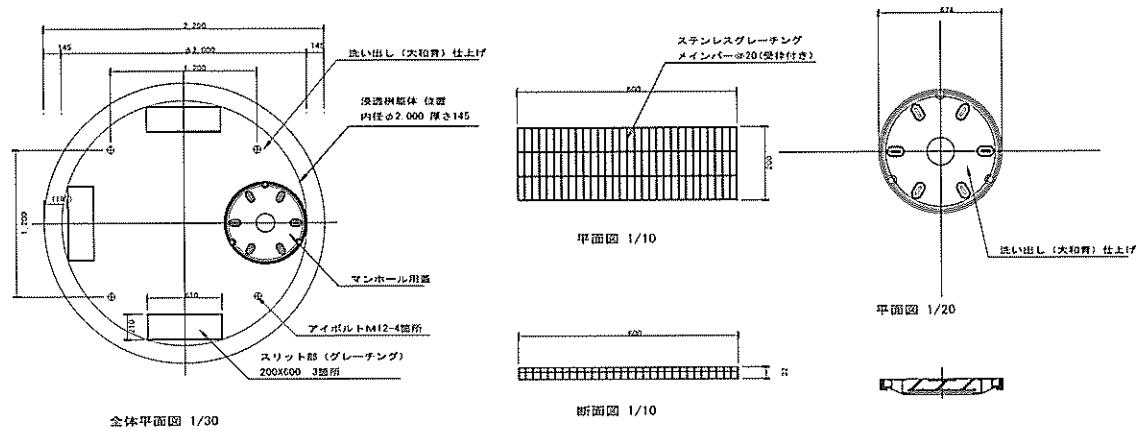
第9図 第Ⅱ期環境整備地域



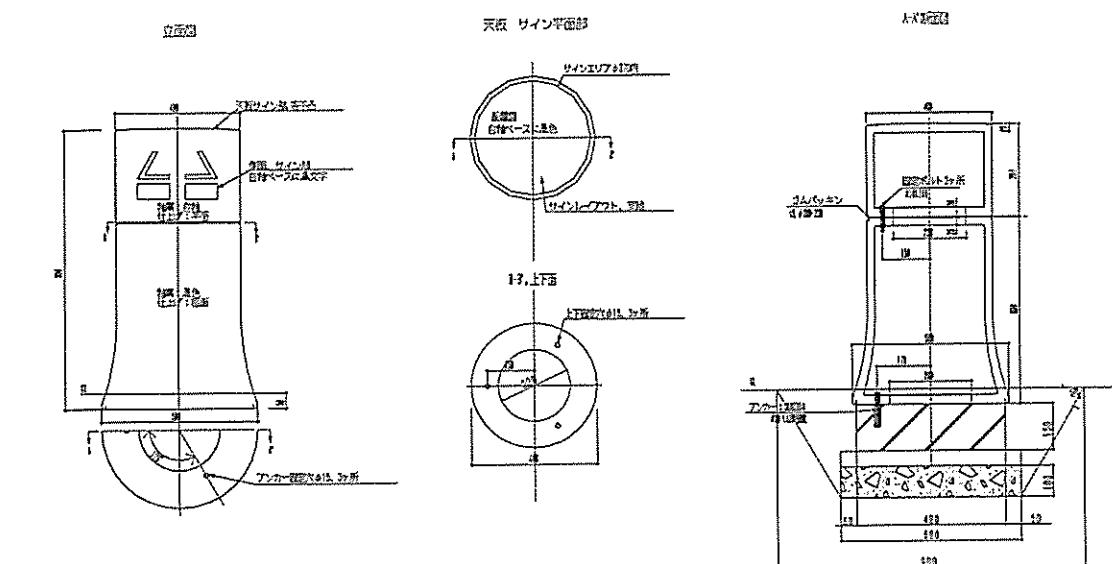
遺構復元（柱列）

園路整備工（木柵）

第10図 第Ⅱ期環境整備（1）



漫透樹



史跡案内板

第11図 第Ⅱ期環境整備（2）

3節 第Ⅲ期環境整備

1. 第3次基本計画

(1) 基本的な考え方

① 世界遺産登録を目指す発信拠点

環状列石は縄文時代の精神文化を示すものであり、世界遺産登録に向け関連遺跡と連携を図り、世界に向け情報発信を行う。

② 環状列石の調査・研究拠点

史跡の解明のため史跡隣接地・周辺遺跡の調査を行う。また北海道南部から東北地方北部に所在する環状列石の調査・研究の拠点とする。

③ 地下遺構の保存と保護

地下に埋蔵される遺構や遺物を保存し保護することを第一目標とする。整備では十分な盛土を行う。高木などを植栽する場合は根が地下へ影響を与えないよう留意する。

④ 歴史的環境の創出

縄文時代の原風景的景観を保全するとともに史跡に残る建物や道路などが視界に入らないよう計画し、歴史的環境を創出する。

⑤ 活用拠点としてのストーンサークル館活動

インターネットによる遺跡の周知を行う。

(2) 基本方針

① 史跡を分断する県道については、迂回ルート検討を含め関係機関と協議を継続する。

② 万座環状列石に隣接する敷地の公有地化を含め、景観に配慮した整備を進める。

③ 第Ⅲ期環境整備は発掘調査の成果に応じて保存・整備・公開・活用方法を検討し実施する。

④ 第Ⅳ期環境整備は、発掘調査によって検出した配石遺構・石列の復元を行うとともに、南端部については景観に配慮し、樹木を植栽する。

⑤ 史跡に隣接する斜面や周辺に分布する関連遺跡については分布調査などを実施し、その保存・活用を検討する。

⑥ ハードな計画と合わせて遺跡の活用を主としたソフト計画の立案を図る。

⑦ これまでに整備が完了した地域のうち、出土文化財管理センターや売店を景観に配慮した施設として改善を図る。

2. 対象位置・面積

野中堂環状列石の北東側(一本木後口配石遺構群周辺)約51,000m²

3. 整備工事概要

(1) 基本設計

① 遺構保存整備の方針

◇ 遺構保存

対象地の遺構は現況地盤面よりほぼ25~70cm以下にあり、保護盛土厚を既存の厚さに合わせ、計画地盤高を遺構面(縄文時代当時の生活面)よりほぼ50cm上げた高さにし、遺構保護を図る。

◇ 遺構表示

A1~4、6区で検出した配石遺構は検出された場所の直上に保護盛土を行ったうえで、

遺構と同種石材で復元的に表示する。またA 6 区・A 7 区で検出された遺構は位置確認に終わっているため詳細な情報を得ていないため遺構表示は行わない。案内板や説明資料などで遺構の存在を示す。

◇ 地形復元

発掘調査に基づき整備予定地の西側のみ地形復元を行う。なお、整備予定地は工事により遺構面を破壊しないよう50cm以上の盛土を確保する。

② 環境整備の方針

◇ 植栽計画

出土堅果類や花粉分析の結果を踏まえ、縄文時代に存在したと考えられる樹木の植栽を行う。対象地の西側県道沿い及び北側農面道側に植栽を行い縄文時代の景観を創出する。樹木植栽地以外は人工的な雰囲気となることを避けるため自然の草地とする。ただし遺構を復元的に表示する部分のみ敷芝とする。

◇ 園路・サイン・その他

対象地には園路を設けず草地のままとする。案内板・遺構名称板は既存のものと同じ素材・デザインとする。

(2) 整備内容

一本木後口配石遺構群地域及びその周辺の発掘調査・聞き取り調査などに基づき整備を行う。
(3) 事業概要

主な事業は次の通り。

① 配石遺構群復元

第1次～3次、22次・23次調査で検出した配石遺構54基と配石列1条を復元した。石材採取地と考えられる大湯川・安久谷川の合流地点上流100～150m付近から同規模の石材を採取し、50cmの保護層を設け復元した。
復元する配石遺構のうち3基は参加体験型とし、一般の方が復元に参加している。

② 地形復元

発掘調査で得られた情報から縄文当時の等高線を作成し、地形を復元した。遺構構築面や当時の地表面を保護するため50cmの保護層を設けている。地形復元により雨水が流れだすのを防ぐため浸透耕1基設置している。

③ 自然環境復元工事

史跡を取り囲んでいたと思われる森を復元するため、花粉分析や出土炭化堅果類、史跡周辺の自然植生を参考に高木・中木・低木・地被類(ツル物類)1, 125本を植栽した。
ほかに鹿角市主催の植樹祭を活用し、高木のブナ・中木のヤマツツジなどを植栽した。

また、復元した配石遺構の周りに敷芝を行った。

④ サイン工

◇ 方向案内板

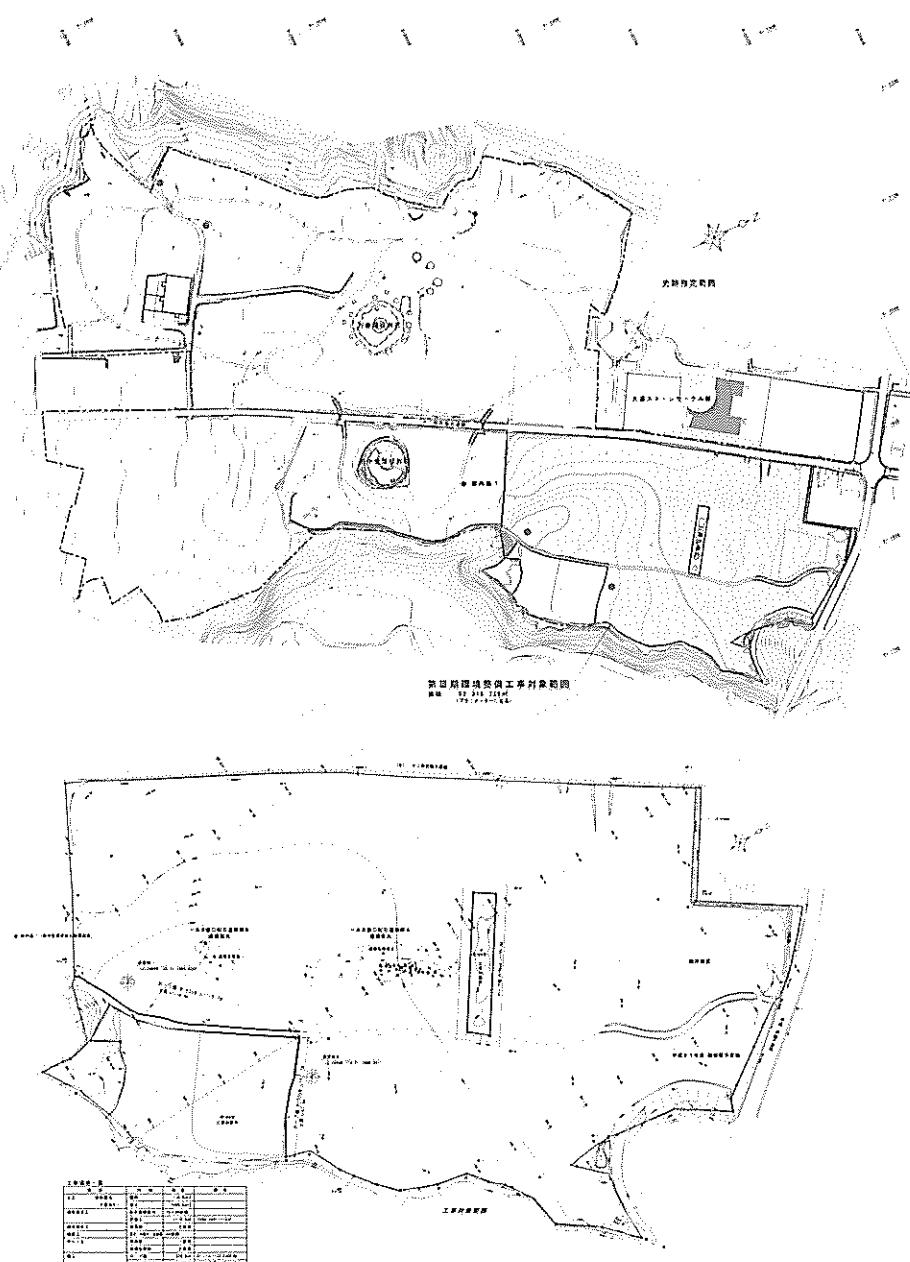
園路の分岐点に1基設置。クラフト陶板製(直径30cm、高さ55cm)。

◇ 遺構名称板

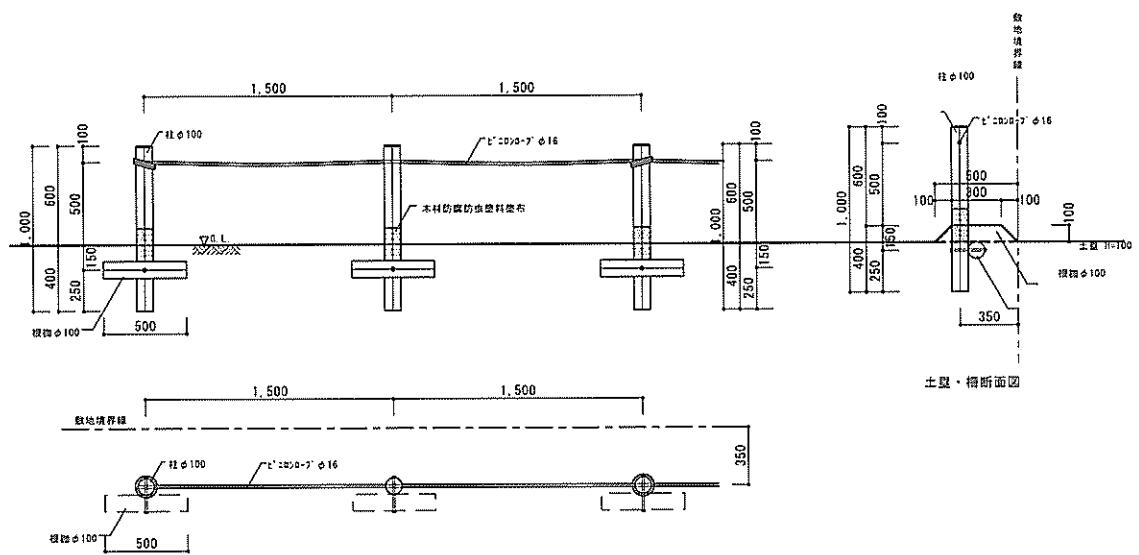
配石遺構群の遺構名称板を2基設置した。クラフト陶板製(直径50cm、高さ90cm)。

第Ⅲ期環境整備概要

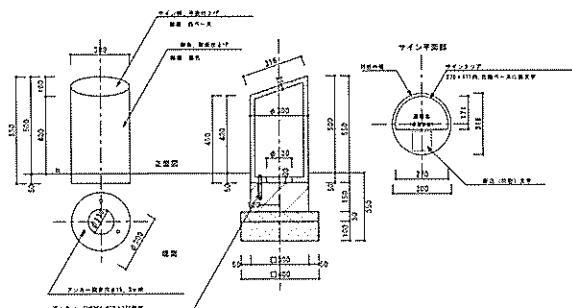
年度	内容
平成 20 年	ハンドボーリング探査、抜根運搬処分
平成 21 年	地形測量、実施設計
平成 22 年	地形復元、浸透樹設置 1 基、土壙 110.0m
平成 23 年	配石遺構群復元(配石遺構 54 基、石列 1 条)、地形復元 自然環境復元(樹木植栽)
平成 24 年	自然環境復元(樹木植栽 1,125 本)、史跡案内板 1 基 遺構名称板設置 2 基



第12図 第Ⅲ期環境整備地域（上：史跡全体図、下：第Ⅲ期環境整備地域）

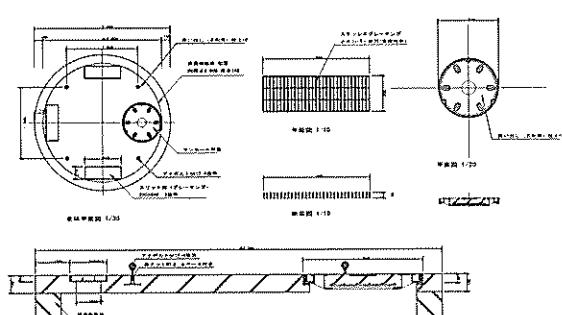


園路整備工（柵・ロープ）

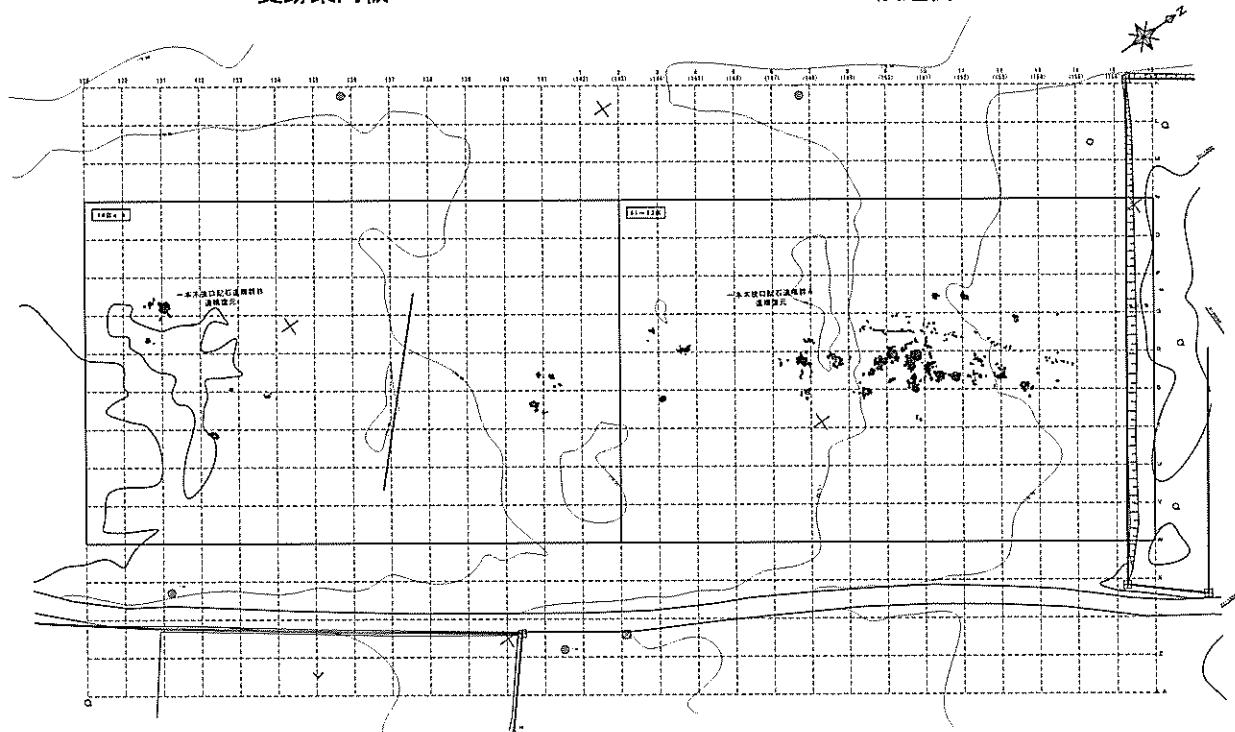


史跡案内板

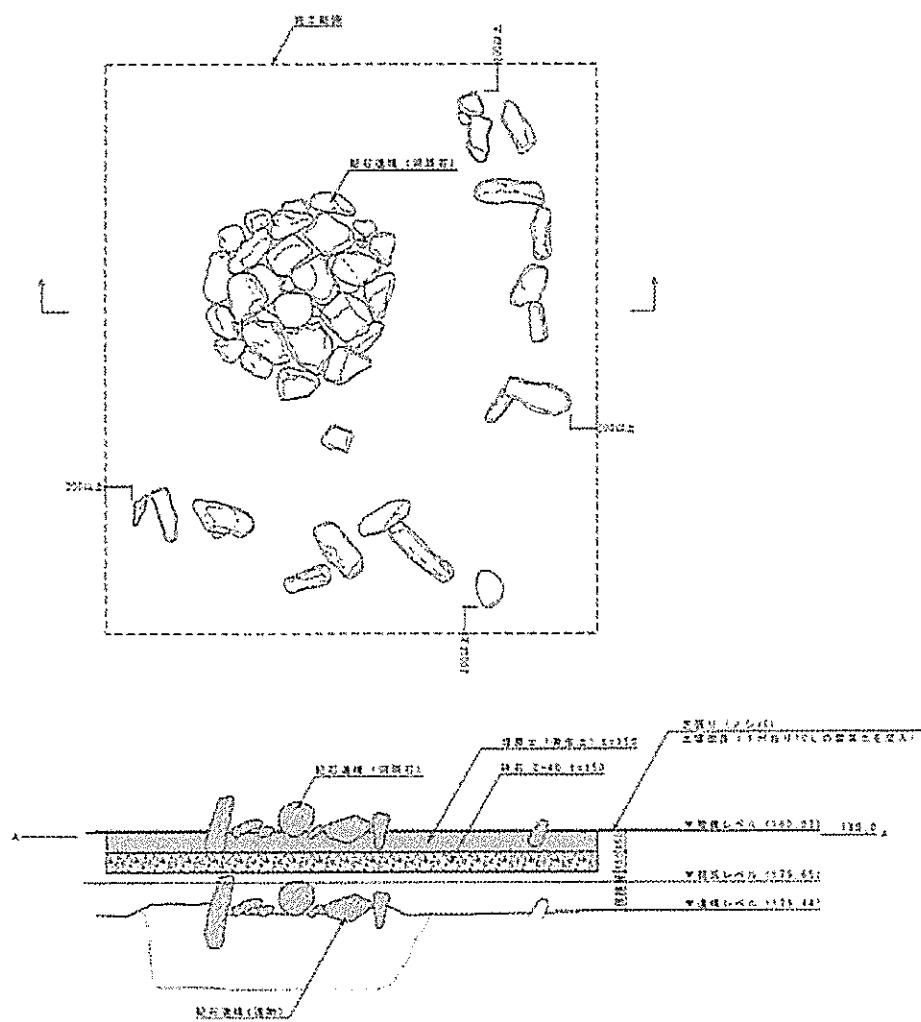
園路整備工（土壘）



浸透樹



第13図 第Ⅲ期環境整備（1）



遺構復元（配石遺構平面・断面）

第14図 第III期環境整備（2）

4節 第IV期環境整備

1. 第4次基本計画

(1) 基本的な考え方

- ① 世界文化遺産を目指す発信拠点
特別史跡に指定された数少ない史跡であり、「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」の構成資産となっており、縄文文化・環状列石の価値を情報発信する拠点を目指す。
- ② 環状列石の調査・研究拠点
環状列石研究の原点となった史跡であり、配石遺構研究の基礎を作っている。国内外の類似遺跡に関する資料を収集し、調査研究を行い、環状列石の研究拠点を目指す。
- ③ 自然的環境の保全と復元
史跡の周辺は当時の原風景的な景観となっており、現代的な要素が入らないよう植栽を

行うとともに、周辺の土地所有者の協力を得ながら景観を保存する。

④ 地下遺構の保存と保護

地下に埋蔵されている遺構や遺物などを保存・保護することを整備の第一目標とする。

そのため遺構構築面から整備面まで十分な保護層を設ける。また植栽では根が地下遺構に影響を与えないよう位置に留意し、樹木の生長に伴う影響を観察する。

⑤ ストーンサークル館の役割

環状列石の調査・研究拠点として成果を発信する。インターネットを活用しPRを行う。

(2) 基本方針

① 対象地において確認された配石遺構・石列を復元する。また、対象地を横断する巡査便道は面影を感じ取れるよう整備する。

② 当時の景観を整え史跡内から人工的なものが視界に入らないよう樹木の植栽を行う。植栽は市主催の植樹祭を活用する。

③ 見学用園路は設けず、現在ある農作業道を活用するほか野草を刈り込み園路とする。

④ 景観に配慮した遺構名称看板などを設置する。

2. 対象位置・面積

野中堂環状列石の南側。

3. 整備工事概要

(1) 基本設計

① 遺構保存整備の方針

◇ 遺構保存

対象地の遺構は適切な保護層を設け、保存する。保護盛土厚は既存の厚さに合わせ、計画地盤を遺構面(縄文時代当時の生活面)より50cm上げた厚さとする。

◇ 遺構表示

H2区で検出した配石遺構・石列は検出された場所の直上に保護盛土を行った上で、遺構と同種の石材を用い、復元する。

◇ 地形復元

発掘調査に基づき地形復元を行う。工事により遺構面が破壊されないよう遺構面上およそ50cm以上の保護盛土を確保する。

② 環境整備

◇ 植栽計画

出土した炭化堅果類、花粉分析の結果を踏まえながら、縄文時代に植生していたと考えられる樹木を植栽し、縄文時代の景観を創出する。植栽範囲は対象地の南側とし、市植樹祭を活用する。樹木植栽地以外は人工的な雰囲気を避けるため自然の草地とする。なお、復元した遺構周辺は敷芝を行う。

◇ 園路・サインなど

園路は設けず、草払いをすることで通路とする。案内板や遺構名称板は既存のものと同じ素材・デザインとする。

(2) 整備内容

野中堂環状列石南地域を発掘調査に基づき整備するほか、江戸期以降明治30年頃まで使

用された街道の整備も併せて行う。多目的に活用できる広場的な機能が果たせる整備・植栽(花粉分析に基づく)を行う。

(3) 事業概要

① 遺構復元

配石遺構3基、石列1条の復元をした。

② 地形復元

発掘調査で得られた情報から縄文当時の等高線を作成し、地形を復元した。地形復元により雨水が流れだすのを防ぐため浸透材1基の設置と土壌の築立を行った。

③ 園路整備工

従来使用されてきた農道が復元する配石遺構と一部重なるため、迂回するよう付け替え工事を行った。

④ 自然環境復元

復元遺構の周り、土壌に敷芝を行った。

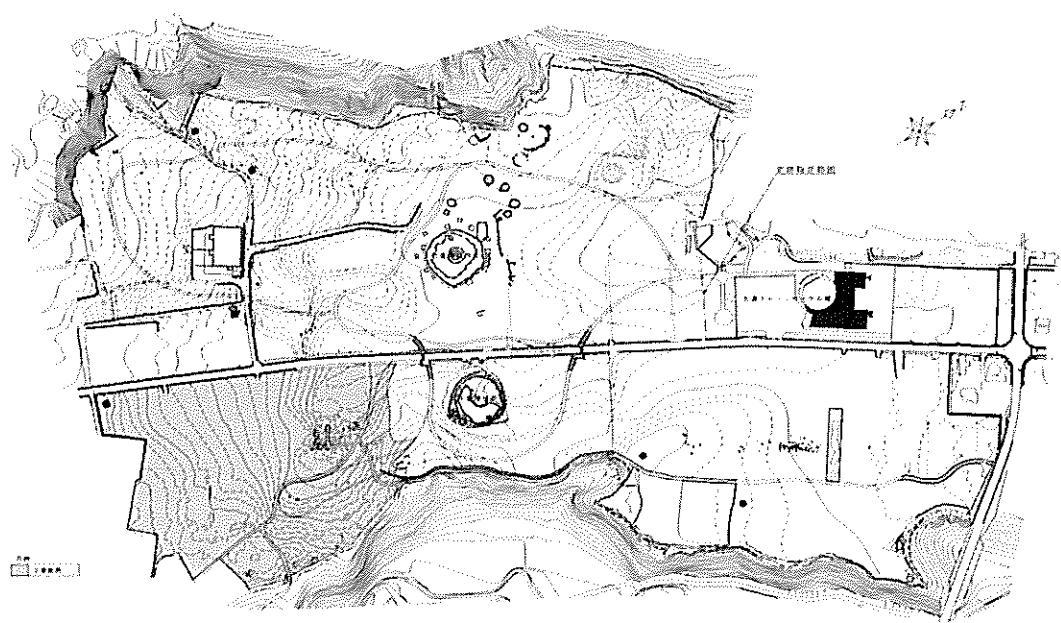
また、鹿角市主催の植樹祭を活用し、高木のブナ・中木のヤマツツジなどを樹木植栽した。なお、この事業は市主催の植樹祭を活用し今後も継続して実施する。

⑤ サイン工

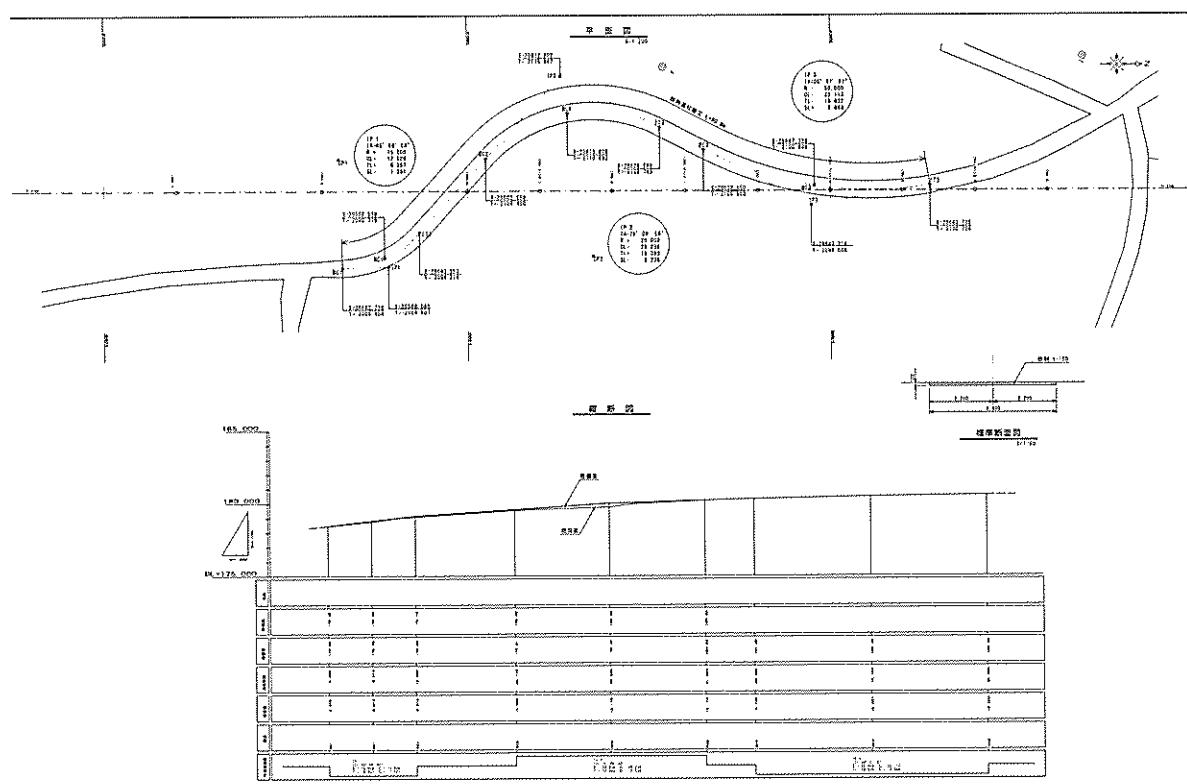
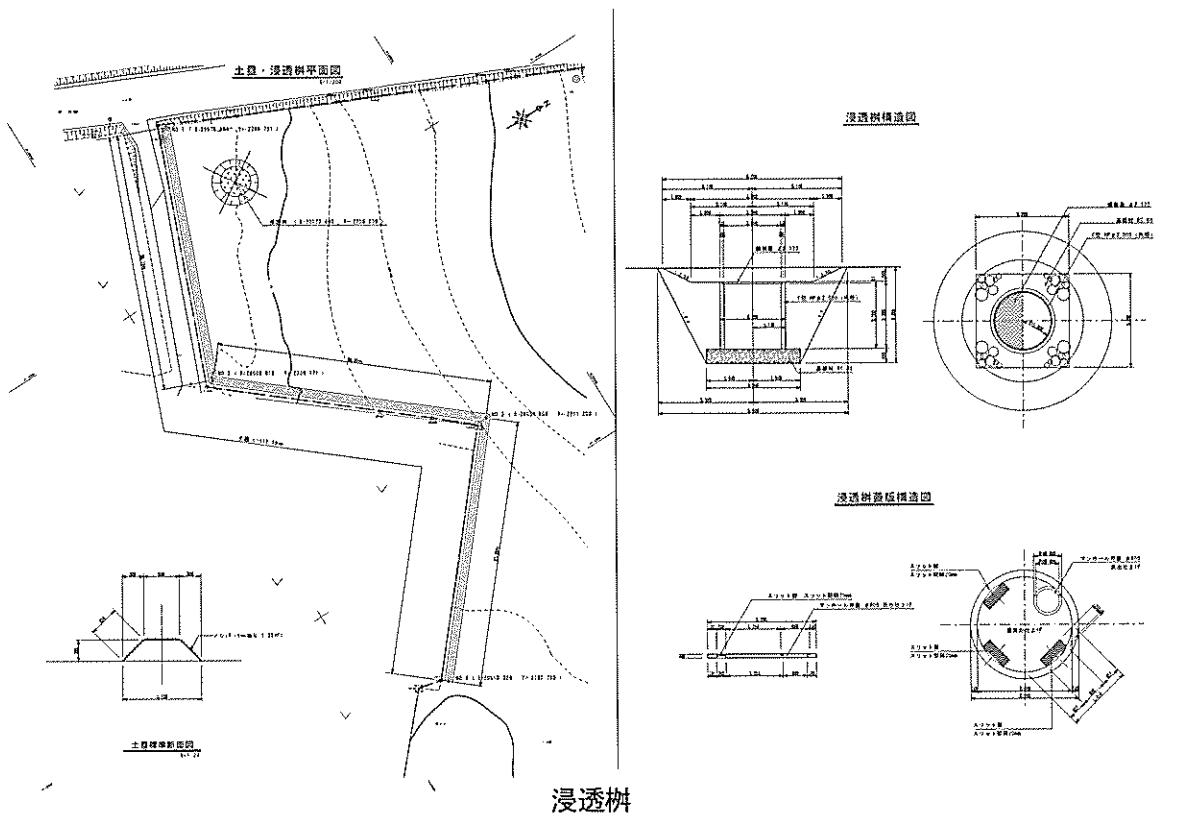
史跡と直接的な関連はないが、野中堂環状列石の東側に江戸時代使用されていた道路跡(巡検使道)が現存するためそれを示す名称看板を設置した。クラフト陶板製(直径30cm、高さ55cm)。

第4表 第IV期環境整備概要

年度	内容
平成25年	基本設計、地形測量
平成26年	実施設計
平成27年	遺構復元(配石3基・石列1条)、地形復元、自然環境復元(樹木植栽) 史跡案内板設置

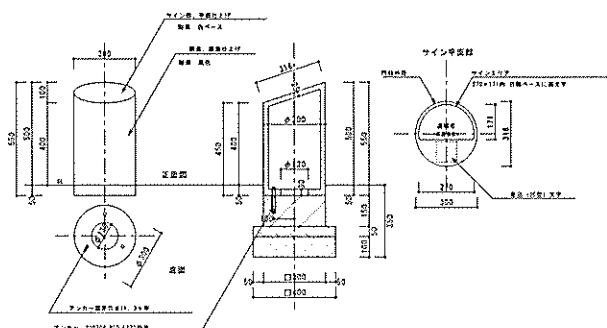


第15図 第IV期環境整備地域（上：史跡全体図、下：第IV期環境整備地域）

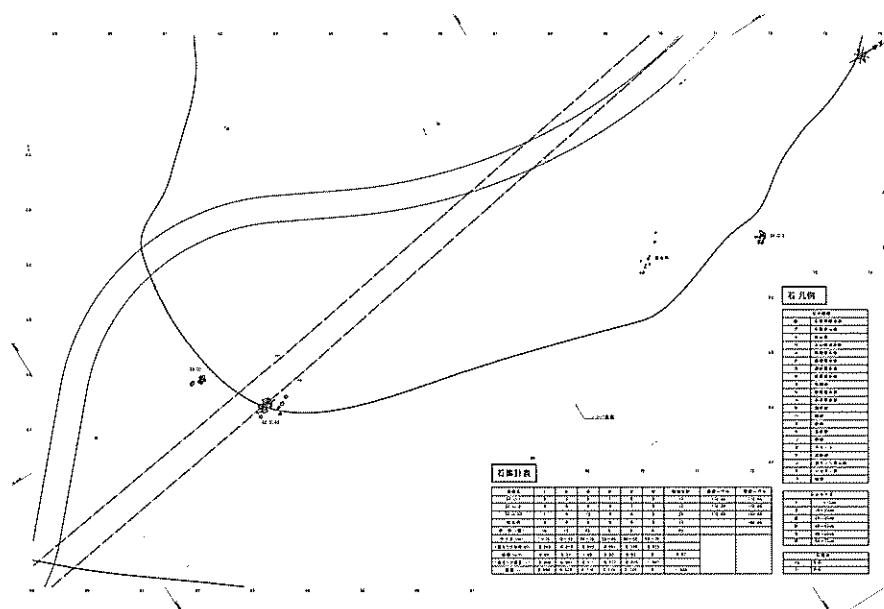


園路整備工（道路付け替え）

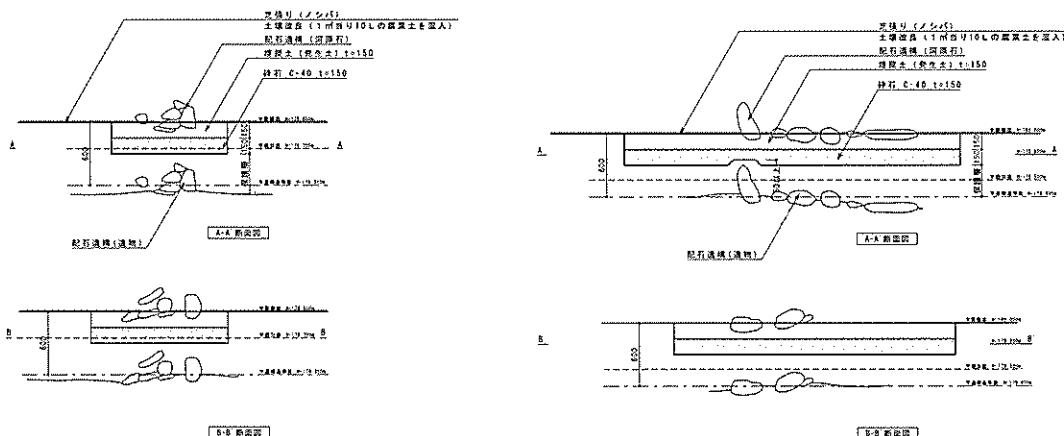
第16図 第IV期環境整備（1）



史跡案内板



遺構復元配置図



遺構復元（配石平面・断面図）

第17図 第IV期環境整備（2）

第5表 環境整備事業

	年度	整備地区	内容
第Ⅰ期 環境整備	平成 10年	万座環状列石北側	実施設計、地形測量、石材保存処理
			遺構復元(環状配石遺構8基、石列1条)、地形復元
			自然環境復元(植栽1,053本)
			園路整備(園路366m、木柵105m)
	平成 11年	万座環状列石 隣接部～北西部	実施設計、石材保存処理
			地形復元、遺構復元(建物8棟、建物柱表示5棟)
			列石保護柵250m、園路整備(園路372m、木柵392m)
	平成 12年	万座環状列石南側周辺	自然環境復元(植栽525本)、案内看板一式、浸透柵3基
			石材保存処理
		史跡北側隣接地(史跡指定外)	建物跡土間叩き締め、雨水浸透溝40m、敷芝4,426m ²
	平成 13年	万座・野中堂環状列石 及びその周辺	ストーンサークル館建設
			地形復元、自然環境復元(植栽89本、敷芝1,835m ²)
	平成 14年	史跡北側隣接地(史跡指定外)	ストーンサークル館建設
			石材洗浄・保存処理
			遺構復元(配石遺構4基)、自然環境復元(樹木植栽729本)
			地形復元、列石保護柵193.8m、浸透柵5基
			園路整備(園路398.33m、木柵172.3m、ベンチ16基、敷芝) 案内看板19基、樹木名称板102基
第Ⅱ期 環境整備	平成 15年	史跡西側地区	地形測量
	平成 16年		実施設計
	平成 17年		遺構・地形復元(拔根運搬処分)、園路整備
	平成 18年		地形復元、浸透柵設置1基、方向案内板2基、ベンチ6基
	平成 19年		園路整備(園路舗装・敷芝1,530m ²)、木柵138.0m
			遺構復元(柱列6本)、遺構名称板1基
第Ⅲ期 環境整備	平成 20年	史跡東側地区 (一本木後口地区含む)	自然環境復元(樹木植栽579本、敷芝4,100m ²)
	平成 21年		自然環境復元(樹木植栽1,129本)
			ハンドボーリング探査、拔根運搬処分
			地形測量、実施設計

	平成 22年		地形復元、浸透枠設置1基、土壙110.0m
	平成 23年		配石遺構群復元(配石遺構54基、石列1条)、地形復元 自然環境復元(樹木植栽)
	平成 24年		自然環境復元(樹木植栽1,125本)、史跡案内板1基 遺構名称板設置2基
第IV期 環境整備	平成 25年	史跡南側地区	基本設計、地形測量
	平成 26年		実施設計、自然環境復元(樹木植栽)
	平成 27年		遺構復元(配石3基・石列1条)、地形復元 自然環境復元(樹木植栽)

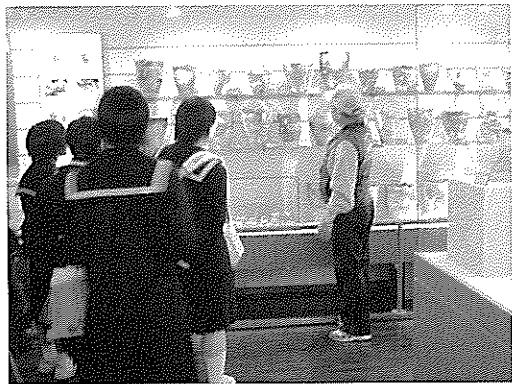
5節まとめ

1. 現況・活用

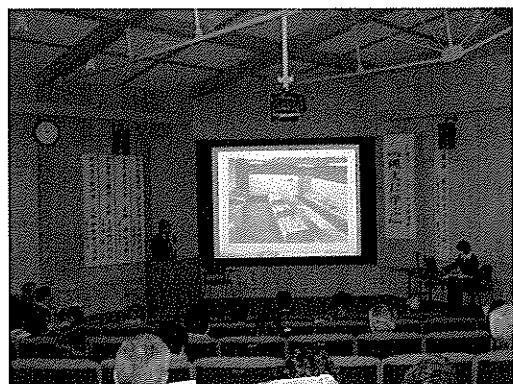
史跡の特徴・性格を表す遺構を復元し、植栽や地形復元することで遺跡が営まれていた当時の原風景的な景観を感じ取れる状況となった。第Ⅰ期で建設した大湯ストーンサークル館では、史跡の解説、出土品の展示のほか、体験学習、縄文文化・環状列石に関する講演・講座を実施している。一般市民や中学生によるボランティアガイドや市民団体による史跡を活用したイベントが行われ市民に親しまれる環境となり、職員や学生の研修受け入れなど学習の場としても利用されている。



体験学習（土器作り）



ボランティアガイド（展示室）



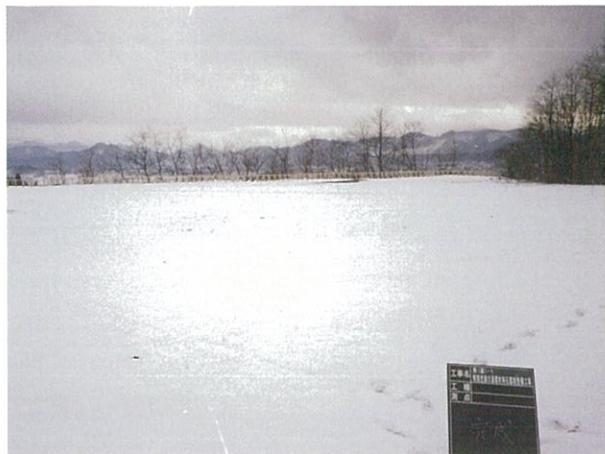
講演会

2. 今後の課題

昭和59年から平成20年度まで25次にわたる発掘調査などを実施したなかで大湯環状列石や縄文文化に関する多くの事柄が判明してきた。その成果を基に平成10年度から環境整備を開始し、計画していた整備は平成27年度に完了し、縄文の原風景を感じられる様相になった。しかし第Ⅰ期に整備した復元遺構やガイダンス施設(大湯ストーンサークル館)には経年による劣化が現れており、長期間の公開に耐えられる遺構の復元などが求められる。また、露出展示をしている万座・野中堂環状列石の保存管理、植栽・地形など環境復元の維持管理を行い、見学環境を維持する必要がある。そのほかに世界文化遺産登録に向け、また『特別史跡大湯環状列石 総括報告書』(平成29年3月)の刊行を受け、大湯ストーンサークル館の展示内容の見直しや、大湯ストーンサークル館を中心とした史跡の情報発信や史跡を活用したイベント、ボランティアガイドの維持・技術向上など検討の必要な課題が多い。

引用・参考文献

- 秋田市教育委員会 2007 『国指定史跡 地蔵田遺跡環境整備事業報告書 - 市民と生徒による手づくり弥生っこ村 -』
- 鹿角市教育委員会 1992 『特別史跡 大湯環状列石 環境整備基本構想』
- 鹿角市教育委員会 1995 『特別史跡大湯環状列石環境整備基本計画』
- 鹿角市教育委員会 2003 『特別史跡 大湯環状列石 環境整備事業報告書(地方拠点史跡等総合整備事業)』
- 鹿角市教育委員会 2004 『特別史跡 大湯環状列石 第二次環境整備基本計画報告書』
- 鹿角市教育委員会 2004 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(20)』
- 鹿角市教育委員会 2005 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(21)』
- 鹿角市教育委員会 2005 『特別史跡 大湯環状列石(Ⅰ)』
- 鹿角市教育委員会 2006 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(22)』
- 鹿角市教育委員会 2007 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(23)』
- 鹿角市教育委員会 2008 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(24)』
- 鹿角市教育委員会 2009 『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(25)』
- 鹿角市教育委員会 2009 『特別史跡 大湯環状列石 第三次環境整備基本計画報告書』
- 鹿角市教育委員会 2010 『特別史跡 大湯環状列石(Ⅱ)』
- 鹿角市教育委員会 2014 『特別史跡 大湯環状列石 第四次環境整備基本計画報告書』
- 新潟市教育委員会 2015 『国史跡古津八幡山遺跡 保存整備事業報告書 2 -1600年の時を越えよみがえる蒲原の王墓 -』



H17 年度 地形復元



H17 年度 園路整備



H17 年度 園路整備(敷芝)



H17 年度 ベンチ・柵設置



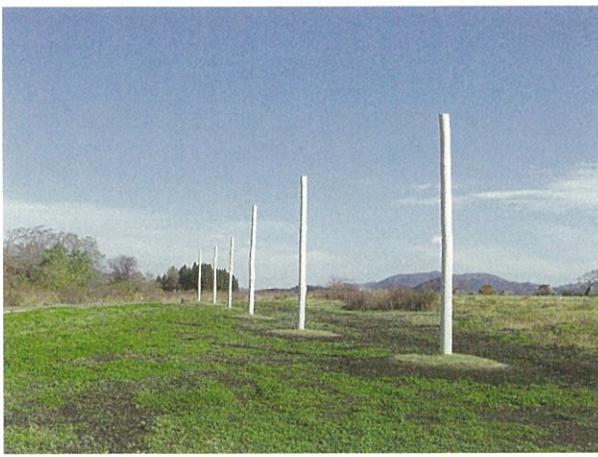
H17 年度 築堤



H17 年度 案内看板設置



H17 年度 浸透枠設置



H18 年度 柱穴列復元



H18 年度 地形造成・敷芝



H18 年度 樹木植栽



H19 年度 樹木植栽



H19 年度 樹木植栽(高木オニグルミ)



H19 年度 樹木植栽(中木キブシ)



H19 年度 樹木植栽(低木クサイチゴ)



H22 年度 地形復元



H22 年度 地形復元(土壌)



H22 年度 浸透樹設置



H23 年度 地形復元



H23 年度 地形復元(敷芝)



H23 年度 樹木植栽



H23 年度 樹木植栽(中木ガマツミ)



H23 年度 遺構復元



H23年度 遺構復元



H23年度 遺構復元(石材配置)



H23年度 遺構復元(石材採取)



H24年度 樹木植栽



H24年度 樹木植栽(高木)



H24年度 樹木植栽(高木)



H24年度 サイン設置



H24年度 案内看板設置



H27 年度 地形復元



H27 年度 地形復元(敷芝)



H27 年度 地形復元(道路付け替え)



H27 年度 浸透枠設置



H27 年度 サイン設置



H27 年度 遺構復元



H27 年度 遺構復元(石材採取)



H27 年度 遺構復元(石材配置)

『特別史跡大湯環状列石
環境整備事業（第Ⅱ期～第Ⅳ期）報告書』

発行日 平成29年3月31日

編集・発行 鹿角市教育委員会

秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1

電話 0186-30-0294

印刷社 株式会社 北鹿新聞社

